

奈良女子大学構内遺跡

発掘調査概報Ⅷ

—中世前期の南都—

2008年

奈良女子大学

はじめに

奈良女子大学構内は、奈良時代には平城京左京(外京)二条六坊十二坪にあたり、都が他に移ってから中世南都や近世奈良町を支える都市の機能をもつ地域として、連綿として人々の生活が行われてきたところであります。

奈良女子大学埋蔵文化財発掘調査会(1981年に組織)は、1981年家政学部ならびに一般教養棟の新営工事に先立って行った発掘調査の結果を「奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報Ⅰ」として編纂し、1982年に発刊いたしました。以来、大学構内施設の新増改築にともなう発掘調査と、その調査結果の公表を逐次行ってまいりました。

このたび、奈良市北魚屋西町の新E棟・H棟の新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要報告書「奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報Ⅶ」が刊行されますことは、誠に喜ばしいことであります。

今回まとめられた報告書の調査対象は、概報Ⅰ(1981年)、および概報Ⅱ(1984年)の発掘調査地と隣接した地であります。今回の発掘調査で、過去の調査結果と併せ考えますと、より多くの貴重な新たな知見が得られたと考えられます。

平安時代末期には、この地は興福寺や藤原氏の支配下にあったものが、平氏による南都焼討ちによってそれらが一新され、中世都市としての南都が成立したことをうかがい知ることができます。

この概報によって公表されます資料が、学術研究面に有用な資料として提供でき、学内外や専門分野の如何を問わず広く活用されますことを念願いたします。この刊行にご尽力頂きました奈良女子大学埋蔵文化財発掘調査会、事務局、埋蔵文化財調査室の関係各位のご協力、ご支援に深く感謝いたします。

2008年3月

奈良女子大学長 久米健次

例 言

- 1 本書は奈良女子大学が実施した奈良市北魚屋西町の新E棟・H棟の新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（下記）の概要報告書である。

新E棟新営に伴う調査 1999年3月10日～同4月6日

H棟新営に伴う調査 2002年8月27日～同9月13日

- 2 各発掘調査の実地にあたっては調査員・坪之内徹が現場を担当し、下記の人々の協力を得た。

伊藤さよ子 土居規美 松岡愛子 宮元香織 三熊あき子 山元章代 吉田幸恵

(以上新E棟)

小林千夏 宍戸香美 中嶋美恵子 三熊あき子 藤原麻理 (以上H棟)

- 3 出土遺物の整理については下記の人々の協力を得た。

東山純子 六車美保 守田めぐみ 瀧田雪江 中川朋香 鈴木紀江 丹治渚

また、遺物の実測・拓本・製図は六車・守田・瀧田が分担して行った。

- 4 遺構写真は坪之内が、遺物写真は坪之内と瀧田が担当した。
- 5 本書の編集は六車・守田・瀧田の協力を得て坪之内が行った。執筆は坪之内以外は文頭または文末に担当者を明示している。

凡 例

- 1 層位と遺構の位置は国土座標によって表示している。また高さは絶対高を表わす。
- 2 遺構の略号、土器の器種分類、軒瓦の型式は奈良文化財研究所で設定したものに準拠した。
- 3 遺構番号は発掘調査区内検出のものにのみ付されたもので、既往の調査の通し番号との関連はない。

目次

I	構内遺跡の調査と中世前期の興福寺西北辺	1
1	中世前期という時期設定	1
2	中世における構内遺跡の位置づけ	3
II	(旧) 三条六坊十一坪における中世前期の遺構の調査	6
1	旧地形と歴史的環境	2
2	新E棟の調査	7
3	H棟の調査	20
A.	遺構と層位	9
A.	遺構と層位	20
B.	遺物	16
B.	遺物	23
a	土器(中世前期)	16
a	土器(中世前期)	23
b	瓦	17
b	瓦	24
c	その他	18
III	中世前期の土器	25
1	土師器皿	25
2	瓦器碗	29
IV	構内遺跡中世前期の遺構の総括	32
1	中世前期の総柱建物遺構について—「集落論」と歴史時代の考古学—	32
2	構内遺跡の遺構変遷	37
3	興福寺西北辺の特徴	39
V	平城宮・南都・奈良町	43
1	平城京から南都へ	43
2	中世都市南都の再生—北小路町寺院遺構—	44
3	中世都市南都の終末と奈良奉行所	45
VI	おわりに—奈良の都市的性格—	45

挿図

- 図 1 SE3131 出土木簡実測図
図 2 旧地形復原図
図 3 従来の調査地
図 4 旧寮建物配置と重ね合わせた近代礎石列
図 5 発掘区遺構配置図・土層図
図 6 SE301 出土土器
図 7 SK305 土師器土釜出土状況図
図 8 SK305 出土土師器土釜
図 9 SK306 出土土器
図 10 SE401 実測図
図 11 軒瓦(新 E 棟)
図 12 漆器椀
図 13 SK201 出土墨書土器・墨画土器
図 14 既往調査出土の墨書土器
図 15 SK101 出土土器
図 16 SE308 実測図
図 17 SE404 実測図
図 18 SE404 出土土器
図 19 軒瓦(H棟)
図 20 構内遺跡出土土師器皿の変遷
図 21 古代末・中世の土師器皿変遷図
図 22 A 技法模式図
図 23 B 技法模式図
図 24 構内遺跡出土瓦器椀の変遷
図 25 安祥寺上寺遺構
図 26 平城宮馬寮上層遺構
図 27 粟生谷遺跡建物 143
図 28 構内遺跡 12 世紀の遺構
図 29 構内遺跡 13 世紀の遺構
図 30 北小路町寺院跡出土軒瓦

- 図 31 薬師寺出土軒平瓦 I 型式
図 32 興福寺出土軒平瓦 III 型式

挿表

- 表 1 十六面・薬王寺遺跡出土土師器皿との法量比較(cm)

附表

- 第 1 表 SE202 出土土器観察表
第 2 表 SE203 出土土器(1) 観察表
第 3 表 SE203 出土土器(2) 観察表
第 4 表 SK201 出土土器観察表

図版

- 第 1 図 SE202 出土土器
第 2 図 SK201 出土土器
第 3 図 SE203 出土土器(1)
第 4 図 SE203 出土土器(2)

写真図版

- 図版 1 遺構(1)
図版 2 遺構(2)
図版 3 遺構(3)
図版 4 遺構(4)
図版 5 遺構(5)
図版 6 遺構(6)
図版 7 遺構(7)
図版 8 SE202 出土土器
図版 9 SE203 出土土器
図版 10 SE203・SK201 出土土器
図版 11 軒瓦

I 構内遺跡の調査と中世前期の興福寺西北辺

1 中世前期という時期設定

歴史学の他分野では、南北朝時代を境にして中世を前期と後期に分けることは、かなりの割合での了解事項であると理解してよいであろう。これは前期が鎌倉時代、後期が室町時代といった政治的な時代区分とも対応していることにもよる。おそらくは経済史、文化史のレベルにおいてもこのような対応関係がみられるのであろう。南北朝時代はまさに大きな転換点と位置づけられている。

歴史学の一分野である考古学においては、7世紀から11世紀までの古代の土器—律令的土器様式—が11世紀中頃から変容して椀と皿だけの単純な様式、すなわち中世的土器様式へと姿を変えて行くという漠然とした認識がある。しかし、それ以後の時代を土器や他の考古資料によって区分しようとする試みには未だ至っていない。

畿内中心部（河内・和泉・摂津・大和・山城）とその周辺では、11世紀中頃から、瓦器という暗文といふし焼きを特徴とした黒い器が、14世紀ごろまで盛んに生産され使用される。少なくともこれらの地域では、この従来見られなかった焼物の出現と消滅をもって、中世前期という時代を説明していこうとする、やはり漠然とした了解事項が生まれている。

問題は瓦器出現の時期と中世前期のはじまりの時期をどのようにして関連させるかということであるが、考古資料としての制約や他地域との併行関係が十分に明らかになっていないこともあって、中世前期の終りとともに、議論はあまり深められていない。

以下では、様式論が土器による時代の変遷の認識に大きな比重を占めているという前提に立って論を進めていくことにし、土器からみた中世（前期）の開始と終末をより精緻にみていくことにしたい。

椀形態の土器について

瓦器に特徴的な器形は言うまでもなく椀である。これと土師器皿によって畿内中心部の中世土器様式が形成されたと考えられている。しかし、少なくとも南都北辺では、11世紀中頃において、椀形態は瓦器に留まらない。黒色土器B類をはじめとして、土師器にも椀形態のものが見られる。

このように、瓦器椀の初現期である11世紀中頃には、瓦器以外にも多くの焼成方法の椀が存在し、椀形態の成立には瓦器という土器焼成技法が必ずしも大きな役割を果たしていないと言える。すなわち、瓦器（椀）の出現が中世土器様式の成立に従来考えられていたほど大きな意味を持たないのである。むしろ、椀が全て瓦器で占められるようになった段階を問題にすべきであろう。

土器様式の成立は（椀という）単独の器種にだけ目を向けるべきではない。次に、杯か

ら変化したとされる中世の土師器皿をみてみよう。

杯から皿への変化について

中世的土器様式を提唱された西弘海氏は、12世紀の畿内とその周辺地域の土器の器種構成を、瓦器碗とそれに土師器皿のほうを「土師器『杯』」と敢えて呼んでおられる。これは律令的土器様式が9世紀以降、器種数を減少させるなかで、奈良時代以来の土師器杯の変化の延長上に中世の土師器「皿」が存在することを明示したもので、我々は便宜的に土師器皿と呼んでいるに過ぎないのである。この杯が「皿」となる転換点を見極めることが重要であろう。図20(1)は11世紀後半の瓦器碗に伴うと考えられる土師器杯(皿)である。口縁部には2度以上のナデが施され、特に端部が強いなど10世紀に見られたe手法の系譜を引くものであることが判る。このように成形・調整に際して必要以上にナデを行う傾向は、12世紀後半の土師器皿(図20-2)になっても残っている。一方で詳細は後述するが、入念なナデを行わない、内面と口縁部内外面の調整だけで済ませる個体(図20-3・4)も多く存在する。つまり、後者の土師器皿は古代の土師器杯(皿)の製作技術の系譜上にはないものであると言えよう。このような古代の生産技術系譜上にない土師器皿は、12世紀中葉以降瓦器碗とともに大量生産されるようになって出現してくるもので、土器だけでみると、この時期に中世的土器様式が確立したのもであると言えよう。考古資料のなかでの土器様式の変化によって時代の変遷を説明しようとする場合、中世前期の開始は(少なくとも畿内中心部とその周辺では)このように把握することが出来る。

さらに、別の視点で中世の「土器様式」をみてみることにする。それは中世における食膳具の実態を考えてみた場合、絵画資料にしる文献史料にしる、碗と皿だけの単純な膳(折敷の上)を見出し難いのである。正確には供膳に使用する土器は瓦器碗(皿)と土師器皿だけなのであるが、膳(折敷上)には複数の碗と複数の皿が載っていると考えざるを得ないのである。すなわち、中世絵画資料における膳の上の器の総数は『病草紙』では6(うち碗2)『絵師草紙』では4(うち碗1)『葛葉絵』では5(うち碗2)等といったように4~7が一般的ようである。碗2の場合は飯碗と汁碗であると考えられる。また、中世の膳をよくとどめていると言われる東大寺の結解の膳も、4~6の器が伴っている。

つまり、日常であるにしる宴會の場であるにしる、個人のために用意された膳の上の器の数は、少なくとも10世紀後半(薬師寺西僧坊)以降中世を通じてあまり大きな変化がないのである。そして、碗形態の出現以降、特に瓦器碗出現以降は、畿内中心部では食膳具のパラエティーは瓦器碗と土師器皿の中に埋もれてしまう結果となった。換言すれば、中世の碗と皿は、古代に比べてもさらに互換性が進んでいると言える。

中世前期の「土器様式」をこのように認識しなおした時、中世前期においては食膳具は

椀と皿だけに収束したのではなく、椀と皿のみで多彩な食膳具を補ったとみるべきであろう。椀と皿による食膳具の構成は平安京の貴族・僧侶・上級武士の間に始まったと考えられるが、彼らが当初使用したのは漆器であった。しかし、この時期の漆器は畿内中心部では十分に普及せず、椀・皿主体の食膳具の平安京外への拡散において主役となったのは瓦器椀と上師器皿であった。漆器椀が南都で食膳具の主役をなし、瓦器椀を駆逐するのは13世紀末になってからと考えられる。但し、この時期になると漆器・中国製輸入磁器・国産陶器を中心に新しい食膳形態が出現し、中世後期へと土器様式が変容していくのであるが、もはやこの段階においては、土器だけでは説明しきれなくなっているのは明らかである。

漆器椀が古代末から中世前期初頭には十分に普及せず、中世前期末にようやく食膳具の主役をなした。このことに関しては、漆器製作工人在古代末から中世前期初頭においては平安京の貴族の支配下にあり、高い地位を保っていたが、中世前期末の時代になるとその相対的な地位を低下させ、民衆の要請に応じた生産を行なっていったためであろうと考えられる。

2 中世における構内遺跡の位置づけ

ここでは中世前期（12、13世紀）に限って考古資料から得られた遺跡の性格について述べてみることにする。

先ず居住遺構であるが、この時期に主体となるのは総柱の掘立柱建物である。SB03（SB3161）・SB2860は柱は大きなものではなく、柱穴も柱規模に合わせて掘られていて古代の方形あるいは隅丸方形を呈するものはない。構造復原や歴史的意義は別項に譲るが、瓦・壁材の出土が見られないことから、基本的には瓦葺きでなく、土壁でない。この点では、同時期の北小路町の寺院跡と対照的である。他には小規模な礎石建物（SX1）があったと推定される（瓦葺きでない）。これは居宅よりも小堂的な性格を有するものであろう。

これらの居住遺構に生活していた人々の性格について、手掛りを得られる文字資料がある。トイレ遺構の可能性が高いSE3131（13世紀前半）から出土した2点の木簡である（図1）。それらは、のちに籾木に転用された可能性が高い。木簡には数字・物品名（桶）等々とともに2名の人名が記されており、これが居住者の性格を反映したものであるとすると、それは先ず職字層ということになり、人名の性質からみて聖職者（僧侶）ということになろう。「万鉢」「意経」のあとにつけられた「法師」「得業」については、14ある僧位のうち、13番目の大法師の中に得業、14番目に法師があり、一般的に言って経歴の浅い聖職者が就いていたと考えられる。こういった下級の僧侶がこの遺跡の構成員の全てではないにしても、寺院中心部からの、伽藍地からも寺地からも外れた位置関係などを併せ考えると彼



図1 SE3131 出土木簡実測図

ら及び彼らと直接関わりのある集団の居住には相応しい場所であることは首肯出来よう。

問題は忠経の頭についている「東大寺」である。これには現在のところ 2 つの解釈がある。ひとつは、中世では東大寺・興福寺の領域が錯綜しており、この時期には東大寺の領域だったとするものである。もうひとつはあくまで興福寺の領域であり、その勢力下にある東大寺の僧が出向いてきて職務を行ったとするものである。これ以外にも解釈が可能であろうが、関連する資料がほとんど無いこともあって、これ以上の論及は困難である。木簡の内容を考察することによって、それが善木以前に使用された目的を探ることが課題として残されていると言えよう。

次に、これら構成員と居住遺構の生活環境について考える。遺構を個別に見てゆくと、この時期（12、13 世紀）で最も注意されるのはトイレ遺構であろう。SE3131 は発掘調査

当初は井戸と認識されたが、花粉分析を担当された金原正明氏によって回虫の卵が試料中に検出されたことが明らかになり、トイレの可能性が高くなった。トイレ遺構の認定や建物・井戸との時期的な対応関係については後に詳述するが、ここでは中世前期のうち、大きな土坑として認識されたトイレ遺構が存在するのは13世紀に入ってからであるということ了指摘しておきたい。

中世における本格的な居住は12世紀(後半)に開始されるが、この時期は井戸や小規模な池(SG3099)が知られるだけで建物跡等は明らかでない。むしろこの時期の中心は北小路町の寺院跡であろう。しかし、13世紀に入るとSB03(SB3161)をはじめとする総柱建物を中心に、大きく浅い池(SG01)に川に向かう傾斜地という立地条件を考えた排水のための水系の役割を担わせている。これは継続を意図した居住形態であり、「中世南都」たる都市の構成要件を発掘資料として得ることが出来たと言わなければならない。

このような遺跡の性格解明の上に立って、歴史的環境に注意してみることにする。

一般的に言って、寺院(8世紀までの古代寺院)はその宗教的役割を果たすために、その中心に礼仏・教学のためのいわゆる七堂伽藍を構えている。これに加えて、寺の機能を維持するために俗人も居住する「付属院地」が周辺にある。大脇潔氏の定義に従うならば、前者を伽藍地と呼び、これと後者を併せた全体を「寺院地」とすることにしよう。

奈良時代までの古代寺院の領域の基本的概念は以上のようなものであるが、古代末から中世にかけてこれらがどのように変化していくかを興福寺の場合で考えてみる必要はない。

12世紀に入ると、興福寺の住僧は僧坊に居住するよりも、貴族的な生活を志向して、寺地内に堂舎を建てて居住するようになる。これが院家である。院家はしだいに一般化して近世の塔頭につながっていくと考えられるが、上述した古代寺院の寺地空間構成から変化していることは明らかである。

例えば、永久二(1114)年に叡尊が南都に移してきた嚴淨院は興福寺西北隅側の「宿院住房」を改めて院家としたことが知られるが、宿院は中山忠親の日記『山槐記』治承四(1180)年12月28日条に平家の南都焼打で焼失した堂舎を列記した中に「宿院」があり、「(同)寺外」の項目に入っていることから、平城京時代の条坊に規制された本来の寺(院)地外にも院家が拡大していることを知るのである。もっとも興福寺という伝統ある古代寺院の性格上、伽藍地には基本的な変化がなかったと言える。詳細は論点を変えて後述するが、ここでは院家の拡大が「寺地外」にも及んでいたことを注意しておきたい。『山槐記』にはまた同じ日の条に「法号なき堂少々これあり」とあることから、主として寺地外にあって把握が比較的困難であると推測される堂があった事も知られる。

こういった近世にかけての門前町とはまた違って、あくまでも興福寺という大寺院（目的域）を維持するために実際に機能する部分（機能域）であると言うことが出来る。

このように文献記録上の特定の場所、特定の施設に構内の遺跡を結びつけるのが無理であるとしても興福寺西北の、本来の寺地外であるが、興福寺を維持するための何らかの施設が設けられていたことは史料の検討から言って妥当なところであろう。そして、考古資料の検討から導き出された識字層、下級の僧侶とその周辺の集団、瓦葺きでない総柱建物、小堂の存在が推定されることなどは、文献からするこの遺跡の居住者像と合致している。

これが中世前期における構内遺跡の中世南都という都市遺跡の中での位置付けであり、このことを基礎にして多くの議論が展開されていかねばならない。

II (旧) 二条六坊十一坪における中世前期遺構の調査

1 旧地形と歴史的環境

奈良女子大学構内は奈良時代の平城京左京二条六坊五坪・十一坪・十三坪・十四坪、同二条七坊三坪・四坪・五坪・六坪にまたがっているが、これらは京廃絶後も継続的な都市的發展を遂げ現代に至っていることは、考古学的調査によって得られた資料からでも明らかである。すなわち、中世都市南都と近世都市奈良町に関係のある考古資料は質量ともに豊富である。

このうちの中世南都では、どのような遺跡のどのような部分を発掘したのかということが、明らかにされなければならない重要課題である。

その前提として、先ず構内遺跡の旧地形を復原し、立地環境と遺跡の相互関係を考えておくことにしたい。

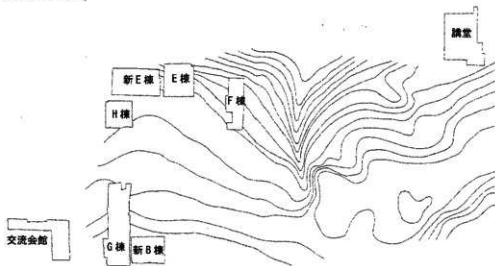


図2 旧地形復原図

旧地形の基本的な構造は南から北への傾斜面で、佐保川に流れ込む 2 本の小河川（いずれも現在では痕跡を留めない）によって小さな谷状・扇状地地形をなしている。

古代ではこういった原地形が大きく改変されること無く土地利用が行われていた。奈良時代の遺構が存在するのは、谷と谷の間の尾根状地形上でなければならなかった。平安時代初頭にはこれが少し改善され、佐保川に接した扇状地末端に一斉に井戸が造られるようになり、自然条件を克服して居住域を広めていった様子を窺うことが出来る。しかし、10・11 世紀には扇状地末端の標高の低い場所には居住が行われなくなる。尾根状地形上の安定した場所に後退するわけであるが、その理由は明らかでない。

中世南都が本格的に展開する 12 世紀後半以降は標高の高低にかかわらず居住が行われるようになり、しかも、ある時期からはトイレや池を中心とした排水のための水系の整備といった都市機能継続のためのシステムを備えた居住遺構へと姿を変えていく。

上述のように、当該地域は奈良時代以降も興福寺の西北辺寺地外という位置で、中世においても何らかの関連をもって継続・発展していったことが推測される。

その具体的な様相は文献史料では必ずしも明らかでないが、考古資料によって、以下に述べるような、都市周縁が牛み出した都市の継続・発展のための諸機能の萌芽を見出すことが出来るのである。

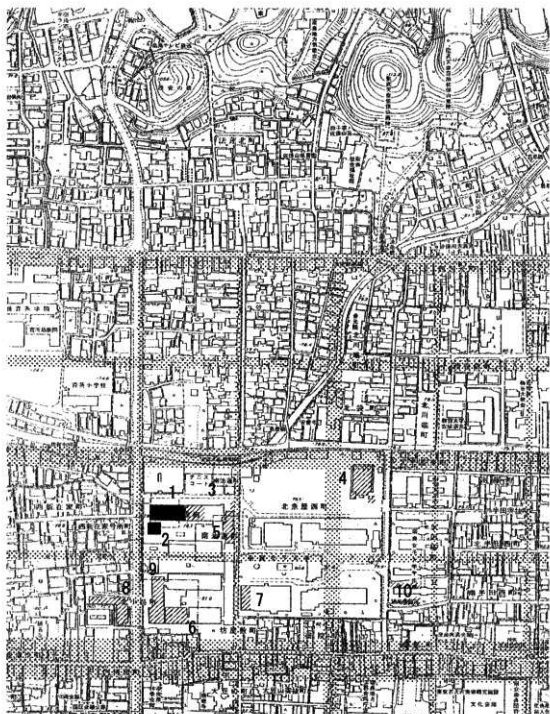
なお、谷状地形が大規模な整地によって埋め立てられ、当該地が現在の地形に近くなるのは 14 世紀に入ってからである。

2 新 E 棟の調査

調査地点は構内の西北部、西 15m にやすらぎの道が南北に走り、北約 60m に佐保川が東から西に流れている。1981 年 9 月に発掘調査を行った E 棟のすぐ西に接し、H 棟はすぐ南に接している。調査区は東西 41m 南北 21m の長方形で、調査総面積は約 860 m² である。

調査日誌 (1999 年 3 月 10 日～4 月 6 日)

3 月 10 日	発掘区の機械掘り開始。	開始。
11 日	人力による遺構検出開始。	25 日 SK201・SE202 を掘る。
12 日	入試のため作業中止。	30 日 遺構写真撮影。
13 日	機械掘り完了。	31 日 写真測量 (クレーンによる)。
15 日	ベルトコンベアー設定。測量基準点設定。	4 月 1 日 遺構配置図、西・北壁断面図作成。
16 日	SK305 掘削。本格的な遺構検出	6 日 SE301 完掘。現場作業終了。



- | | |
|---------------|------------|
| 1 今回の調査地（新E棟） | 6 新B棟 |
| 2 今回の調査地（H棟） | 7 情報処理センター |
| 3 E棟 | 8 国際交流会館 |
| 4 講堂 | 9 G棟 |
| 5 F棟 | 10 新寮 |

図3 従来の調査地

A 層位と遺構

調査地は過去の校舎(旧寮)建設のための整地によって平坦となっているが(海拔 79m)、従来は傾斜地をベースとしてその上に多様な遺構が立地していたと考えられる。

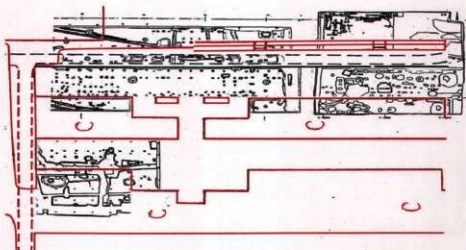


図4 旧寮建物配置と重ね合わせた近代礎石列

旧寮建設のための遺構面の削平は、発掘区断面観察による層位と遺構の時期区分の相互関係の認識にも影響を及ぼしている。すなわち西壁・北壁ともに表土(第3層)下50~70cmで地山(第1層・明黄褐色砂礫土)があらわれるが、それまではすべて近代以降の攪乱(第2層・暗茶褐色砂質土)である。したがって、中世前期の井戸 SE202、土坑 SK201、中世後期の井戸 SE301、土坑 SK305 といった主要な遺構は全て地山である明黄褐色砂質土上で検出された。但し、近代以降と考えられる井戸 SE401、埋甕 SX402・403 に関しては、検出面は不明である。

以上のように、層位にもとづく時期区分が困難であるため、出土物による時期比定のみでB-1期(中世前期)、B-2期(中世後期)、C-1期(近世)、C-2期(近代)の4時期に分けた。

各時期の遺構の概要は以下の如くである。

B-1期

SE202 調査区中央より西南にある井戸。平面は東西1.4m、南北1.5mの不整円形。遺構面から5.1m掘り下げた所で底に達した。坑底は平坦な円形で、中央に水溜り状の円形凹地が掘られていた。埋土は灰褐色粘質土で中から瓦器碗・土師器皿・東播系須恵器捏鉢・中国製白磁碗・同壺・木製箸等が出土した。瓦器碗・土師器皿の年代から12世紀後半に比定される。

SK201 調査区中央より北寄りにある大土坑。平面は東西 2.15m、南北 2.5mでやや不整形円形である。遺構面から 4.3m掘り下げたが底に達しなかった。埋土は上層が灰黒色土、下層が暗灰青色粘土と暗灰色砂質土の互層で、遺物の出土が比較的少ない。埋土中から瓦器碗・土師器皿・中国製白磁碗・漆器碗・下駄・獣骨等が出土した。瓦器碗・土師器皿の年代から 13 世紀後半に比定される。土坑の規模や堆積状況などから考えてトイレの可能性はある。

B - 2 期

SE301 発掘区東北隅にある井戸。平面は東西 2.45m、南北 2.30m以上で、一部は北壁外に伸びる。断面は遺構面からの深さ 1.12mの所まで喇叭状に上にひろがり、それより下は筒状である。遺構面から 7.40m掘り下げた所で底に達し、井戸枠は認められなかったが、抜き取られたと考えられる。埋土は茶褐色砂礫で、中から 14 世紀後半の土師器皿・土釜・鍋・国産陶器・中国製輸入磁器および瓦片が出土した。

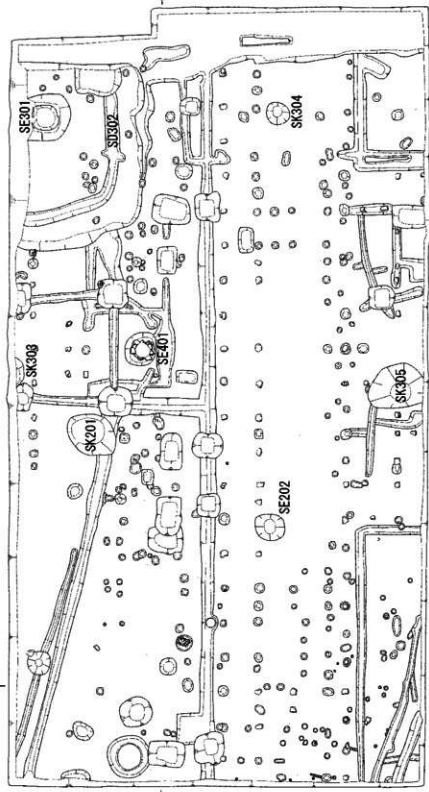
SE301 出土土器 (図6) 土師器皿 (1~9) は赤褐色を呈するもの (1~7) と灰白 (褐色を呈するもの (8・9) があり、前者の方が圧倒的に数が多い。(1~6) は口径 10.0~10.5 cmの大皿 (1~4) と口径 10.0~10.5 cmの小皿 (5・6) に分けられる。(7) は深い鉢状の器形であるが、皿に含めた。(8・9) は (8) が口径 10.8 cmで、(1~4) に対応するものであろう。土師器脚部 (10) は高杯脚部のように中空でなく上下に浅い孔状の中空部分があり、お互いに通じていない。土師器土釜 (11~14) は口縁部が内湾し端部が外側に折れるのが特徴で、口径 13.5 cmのもの (11)、口径 18.0~18.5 cmのもの (12・13)、口径 24.5 cmのもの (14) に分けられる。菅原正明氏分類の大和 H1 型に属する。土師器鍋 (15・16) は口縁部がくの字状に外折し、端部が僅かに内面肥厚するのが特徴である。中国製輸入磁器 (17・18) は (17) が同安窯系青磁皿 (大宰府分類皿 I - 1)、(18) が白磁皿 (大宰府分類 VI - 1b) である。国産陶器 (19~22) のうち (19) は東播系こね鉢口縁端部は肥厚し、器壁は厚くなっている。(20~22) は常滑焼甕の胴部または肩部の破片で、調整の最終段階での押印が特徴的である。(20) と (22) は同一原体を使用している可能性がある。

土師器皿・土釜の型式・法量を比較すると、構内遺跡 SD431 出土土器と共通するものがあり、14 世紀後半の年代を与えることができる。しかし、赤褐色系土師器皿 (いわゆる赤土器) と灰白色系土師器皿 (いわゆる白土器) の比率でみた場合、SD431 がおよそ相半ばするのに対して、SE301 ではほとんどが赤褐色系である。また、SD431 に多く見られた半球形の小型瓦器碗が全く見られないのも注意されよう。これは赤土器と白土器の比率が時期的変遷を反映しているだけでなく、同時期における遺構の性格によっていることを示し

LH-79.000

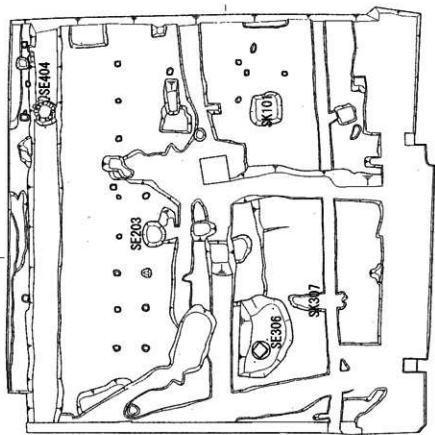


Y-15650



X=-145820

000 6L=H1



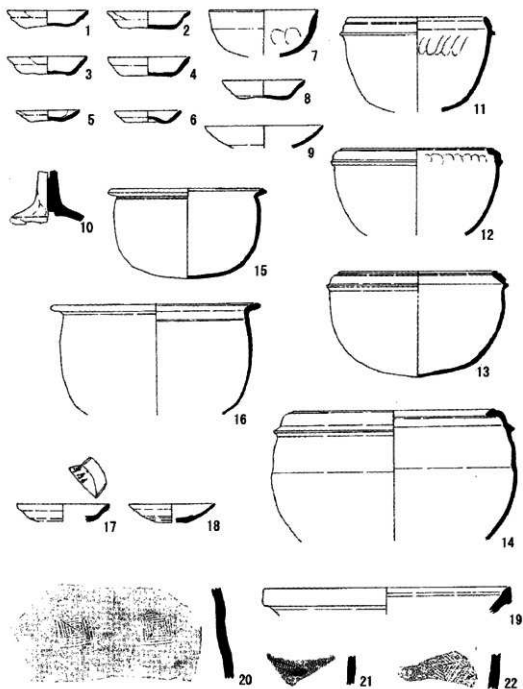
X=-145850

- ① 明黄灰褐色砂礫 (地山)
- ②③ 表土



图5 凭据区地槽配置图・土層图 (1/200)

ていると言えよう。



0 20cm

図6 SE301 出土土器

SD302 SE301 の西側から南側にかけて幅 0.5~0.7m、深さ 0.02~0.13mで逆 L 字状に走る溝。北壁外・東壁外に伸びると考えられる。年代の判明する遺物が出土していないが、15 世紀後半~末と考えられる土坑 SK306 に切られていることや、東隣の E 核調査区から続いてくる地形の落ち込みの下場に位置していることなどから、SE301 との関連性を意識して掘られた蓋然性が高い。

SK303 発掘区北壁際中央よりやや東にある土坑。大部分は北壁外にあると考えられる。壁際での東西 1.5m、南北 0.4m (以上)、深さ 0.4m。埋土は上層が礫混りの灰茶褐色砂質土、下層が暗茶褐色砂質土で、15 世紀の土師器・瓦質土器が出土した。

SK304 東半中央部よりやや東寄りにある土坑。平面は東西 1.2m、南北 1.2m の円に近い形を呈する。遺構面からの深さ 1.9m で底に達した。坑壁がほぼ垂直であることから井戸の可能性もある。埋土は礫混暗灰色粘質土で、中から 15 世紀の土師器・瓦質土器が出土した。

SK305 南壁際中央にある土坑。平面は東西 2.35m、南北 2.9m 以上と不整形で一部は南壁外に伸びる。遺構面から坑底までの深さは 2.5m であるが、坑が埋められていく過程で、土師器土釜 5 個体を南北方向に 2 列に並べ、他に墨書土師器皿も 3 点出土していることから、何らかの祭祀行為の跡と考えられる。埋土は暗灰褐色を呈し、土師器土釜および埋土中の土器 (土師器皿、瓦質土器火舎・播鉢、中国製輸入磁器) は 16 世紀後半のものである。

SK306 SE301 の東南、東壁際にある土坑。東西 1.4m 以上、南北 2.4m、深さ 0.2m で、東側を攪乱によって破壊されている。埋土は暗灰褐色を呈し、中から 15 世紀後半~末の土師器土釜、瓦質土器、国産陶器が出土した。

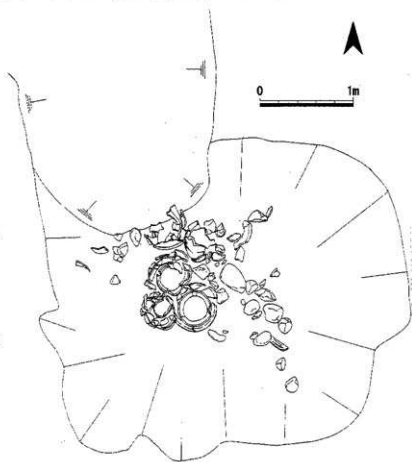


図7 SK305 土師器土釜出土状況図

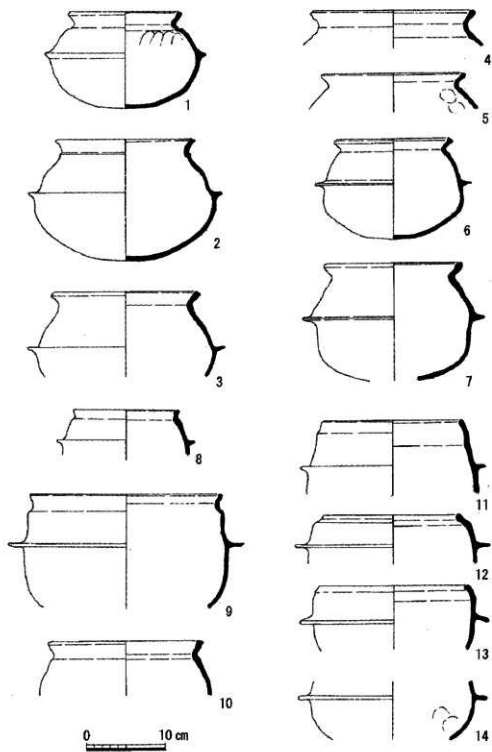


图8 SK305出土土器土釜

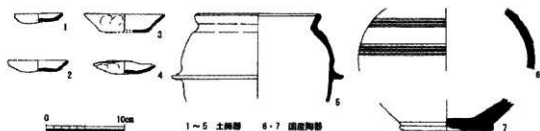


図9 SK306 出土土器

C 期 (C-2 期)

SE401 発掘区中央東北寄りにある石組み井戸。遺構面から1.5mのところまで掘るのを止めた。石組み枠内法は径0.8m、各石材は人頭大前後の大きさで、加工が施されており、面を内側に揃えている。

出土遺物や埋上の状況も新しく、この井戸が寮の建物をつなぐ廊下状部分の中央に位置することから寮で使用された井戸であろう。

SE402・403 発掘区西半中央やや北寄りに埋置された陶器大型甕。年代および用途は不明であるが、近代以降の所産であろう。

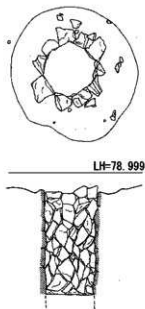


図10 SE401 実測図 (S=1/40)

B 遺物

a 土器 (中世前期)

SE202 出土土器 (第1図、図版8) 十師器皿 (1~17) は口径14.5~15.5cmの大皿 (1~8) と10.0~11.0cmの小皿に分けられる。SE203とちがって、この二法量を大きく外れる個体はない。大皿調整のためのナデは簡略化されたものが多い。小皿も口縁端部を強くナデる、いわゆるe手法のものは非常に少ない。十師器器台 (18) は皿同様の時期のものが口径最大となるようである。土師器器台付皿 (19・20) は脚部が直立するもの (19) と裾に向かって外方に拡がるもの (20) とがある。いずれも脚部内面を除く全体にスス状の黒色物質が付着している。土師器土釜 (21・22) は形態はSK203のものと同じであるが法量がやや異なる。しかし、反転復原であるため慎重な検討が必要であろう。瓦器碗 (23~26) は口径・器高をはじめとする形態の指標に大きなばらつきはなく、同じ時期と考えてよいが内底面の暗文は連結輪状のもの (24・25) と連結円弧のもの (23・26) の両方がある。瓦器皿 (27~30) は口縁部内面の横方向のミガキはなくなっている。(31) は東海地方の山茶碗小皿で、底部外面に糸切り痕を残す。(32) は中国製輸入磁器白磁壺の底部である。内面にも釉が見られるが、意図されたものかどうか不

明である。

SK201 出土土器 (第4図)

(1) ~ (12) は土師器皿で、口径 8.6~13.1 cm、器高 1.5~2.9 cm である。(3) (4) (11) (12) はいわゆるへそ皿、(5) は台付皿である。(13) ~ (15) は土師器土釜の大和 H1 型で、どれも器壁外面にススが付着しており、全体が残存するものがない。(16) の瓦器皿は口径 9.1 cm、器高 1.5 cm で、内面にはわずかに暗文が見られる。(17) の瓦器碗は口径 11.6 cm (復原)、器高 2.8 cm、底径 4.4 cm で、内面には暗文が施されている。(18) は瓦質土器甕で、頭部にタタキ目状の調整痕が認められる。(19) ~ (22) は東播系須恵器埴鉢で、それぞれ一部分が出土しているが、別個体と考えられる。(23) は山茶碗小碗で、内底面には使用痕があり非常に滑らかである。(24) は陶器甕、(25) は陶器鉢。(26) (27) は中国製の黄釉陶器盤で、口縁が外反し、文様は部分的で判然としないが 4 つの円が交差するタイプと考えられる。(28) は同安窯系の青磁皿で、破片の一部しか残っていなかったが大宰府同安窯系青磁皿 I-1 に相当するものと見られる。(29) は白磁碗で、図では一案として大宰府白磁碗 IV-2 として復原している。内面のみ乳白色の釉が施され、外面の体部下半と底部にはカキ取りが見られ施釉されていない。(30) は龍泉窯系の青磁碗で、鏝のない蓮弁文様を有し、大宰府龍泉窯系青磁碗 I-5・a に相当する。

b 瓦

瓦は発掘面積に比して出土量は相対的に少ない。ここでは中世前期以前の軒瓦にだけ説明を加える。

半截花文軒平瓦 (1) SE202 出土。軸をもつ木の葉様の花卉 3 枚一組から成る半截花文が本来は上下 2 単位ずつ計 4 単位表現されているが、左側各 1 単位しか残存していない。凹面瓦当寄りに布の端痕跡が認められるが、磨滅のため布は明瞭でない。凸面は鏝部から平瓦部にかけてタテ方向の刷毛で調整されている。興福寺食堂等で出土している同文の平瓦 (藪中氏分類の VII 平 D 2) と同范であることを確認した。

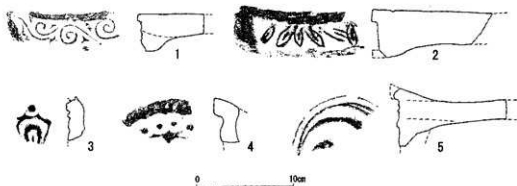


図 11 軒瓦 (新 E 棟)

偏行唐草文軒平瓦(2) SK201 出土。右から左に流れる偏行唐草文が主文で、唐草の卷きは大きい。主葉・支葉とも独立しているのが特徴である。凹面には布目を残し、一部をヘラ削りしている。凸面は頸部から平瓦部にかけてタテ方向の刷毛目が施されている。興福寺出土瓦の葺中氏分類VI平3に近い文様のものがあるが、同范関係は明らかでない。

単弁八弁蓮華文軒丸瓦(3)(4)

SE202 出土。いずれも蓮弁と外区珠文の断片である。珠文は粘土を彫り込んで造られているという見解もあるが、型押しの可能性もある。葺中氏分類のV丸B1で、いわゆる永承再建瓦の一つである。

巴文軒丸瓦(5) SE301 出土。周縁を欠いているが、やや大ぶりな左回り三ッ巴文が主文である。主文外側の周縁との間に界線が一周回る。葺中氏分類のVII丸E2。

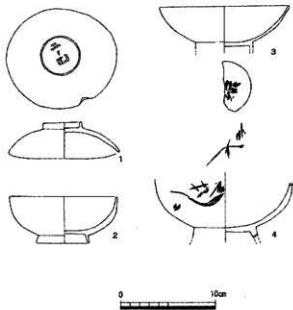


図 12 漆器碗

c その他

木製品(図 12)

木製品はここではSK201とSK301の漆器のみを報告する。

(1)は蓋で、現状では口径はやや歪んでおり、長径 11.5、短径 10.5、高さ 3.7 cm。つまみ部径 4.4、高さ 0.7 cm。全面黒に漆が塗られており、ほぼ完形であるが文様はない。つまみ部内面に「二ノ四(カ)」の筆跡がある(材質不明)。SK201 出土。

(2)は椀(身)で、口縁部の3分の2以上と底部の一部と高台の大部分を欠損している。復原口径 11.5、復原高 5.0、復原高台径 5.6 cm。内外面黒の下地の土上から内面赤・外面黒に塗漆されている。SK201 出土。

(3)は椀(身)で全体の1/2強残存。高台部分下半を欠く。口径 13.8 cm。全面黒漆を塗ったのち、高台内外面と口縁端部を残して赤漆を塗っている。また、高台内底部外面に赤で草花状の文様が手描きされている。SK301 出土。

(4)は椀(身)で全体の1/2弱残存。口縁部・高台部分下半を欠く。残存高約 7.5 cm。内外面黒漆塗り。体部外面と内底面に赤で草花状の文様が手描きされている。

墨書土器・墨画土器(図 13) 1・2いずれもSK201 出土。(1)は土師器(皿カ)の外

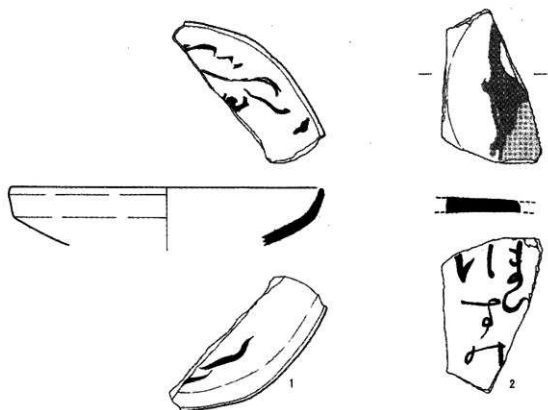


図 13 SK201 出土墨書土器・墨面土器 (S=2/3)

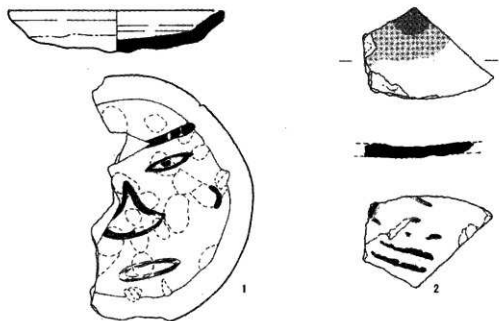


図 14 既往調査出土の墨書土器 (S=2/3)

面に仮名ばかりが書かれていて、「ま」「す」「の」(乃?)は読み取ることができるが他は不明である。内面にも墨痕があるが、断片であるため明らかでない。

(2)は土師器皿の内外面に墨痕が認められ、字の可能性もあるが墨画と考えた。断片であるため、何を表現しようとしたかは不明である。

〔参考〕(図14)に既往の調査で出土した墨画土器をあげる。(1)は講堂の調査で出土。12世紀中葉から後半と考えられる土師器小皿の底部外面に人面を墨画したもので、眉・目・鼻・口以外に、頬骨あるいはヒゲらしき表現も認められる。(2)はF棟の調査で出土。土師器(皿カ)の外面に2本以上の平行線の墨痕が認められるが、やはり断片のためそれ以上は明らかではない。

犬の骨

SK201から犬の骨が出土している。詳細は、附篇を参照されたい。

3 H棟の調査

調査区は新E棟調査区西半を南に伸ばすような形で、東西22m、南北22.5mと正方形に近い。調査面積は約500㎡である。

調査日誌(2002年8月27日～9月13日)

8月27日	発掘区の機械掘り開始。	9日	SE308を掘り始める。
29日	遺構検出開始。	11日	写真撮影・写真測量(クレーンによる)。
30日	機械掘り終了。	12日	東壁断面図作成。
31日	SK101を掘る。	13日	SE308・SE404の図作成。
9月2日	測量基準点を設定。地区坑打ち。	30日	SE308の井戸枠取り上げ。
3日	SE203を掘る。		

A 層位と遺構

調査地は新E棟と同様、本来は傾斜地であった所をテラス状に削平しており、特に旧寮建設が行われた近代以降に著しい。そのため、多様な時期の遺構は、やはり表土下約40cmの地山面上で全て検出される。

東壁の所見では、第1層が明黄灰褐色砂礫(地山)、第2層が明黄灰褐色粘質土、第3層が表土である明淡褐色砂で、第2・3層はテニスコート造成のための置き土である。その他、配管やケーブル線埋設のための攪乱が多く認められる。

当該地点は旧寮建設に伴うテラス状削平が新E棟よりも著しかったため、各時期に対応する本来の遺構面の残存はなかった。

ここでもやはり、層位にもとづく時期区分が困難であるため、出土遺物による時期比定

に止まらざるを得ない。A期（古代）、B-1期（中世前期）、B-2期（中世後期）、C期（近世）の4時期である。

各時期の遺構の概要は次の如くである。

A期

SK101 発掘区中央よりやや東南にある上坑。東西1.8m、南北1.75mの不整形を呈し、遺構検出面からの（以下同じ）深さ1.4mである。坑底が水平であり、四壁が垂直であることから井戸の可能性もある。埋土は暗茶褐色粘質土で若干炭を混じる。平安時代初頭の土師器・須恵器・黒色土器（A類）が出土した。

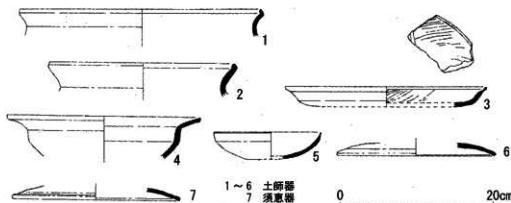


図15 SK101出土土器

B-1期

SE203 発掘区中央より僅か北にある井戸。平面は東西1.4m、南北1.2mの不整形円形。深さ1.6mまで掘り下げた。杵の残存は確認していない。埋土は灰褐色砂質土で、平安時代末（12世紀後半）の土師器皿、瓦器椀、須恵器鉢・片皿、中国製輸入磁器が出土した。

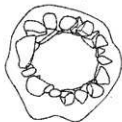
B-2期

SE308 発掘区西半中央よりやや南寄りにある木杵の井戸。東西4.35m、南北2.9m以上の不整形な掘形の中央西寄りに三段の井戸杵を据えている。この井戸杵は上・中・下三段に分かれ、上段は内径0.95m、高さ0.6mの桶を逆さに転用、箍も残存していた。中段は建築部材と考えられる木材を転用してやはり桶状に組み合わせ、内径0.88m。高さ1.13mの井筒を造り、下段は縦板組横棧留めで、内法は0.67×0.68m、高さ約1.3mの四角柱状の構造である。埋土中から15世紀前半の土師器皿・土釜、国産陶器、中国製輸入磁器および瓦が大量に出土した。

SK307 SE308の南東にある土坑。東西1.0m、南北3.1m、深さ0.23mと不整形で細長く浅い。南半の一部を現代の攪乱によって断ち切られている。坑内から15世紀前半の土師器皿と8世紀の興福寺式軒平瓦が出土している。

C期

SE404 発掘区東北隅西寄りにある石組み井戸。上部を建物基礎によって破壊されている。その建物基礎の破壊面から1.5mの深さまで掘った。石組みの内法は東西0.65m、南北0.50mで、拳大から人頭大の大きさの石を用いている。埋土は暗灰色泥土で、幕末（19世紀前半）の土師器、国産陶磁器が出土した。



LH=77.528

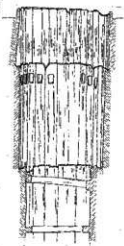


図16 SE308 実測図 (1/40)

LH=78.529

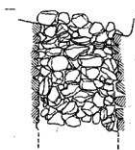


図17 SE404 実測図 (1/40)

SE404 出土土器図 (図18) (1・2)は土師器、(3~5)は国産磁器、(6~10)国産陶器である。土師器焙烙(1)は、口径29.6cm、器高7.5cm。胎土には金雲母片・白色細砂粒を含み、色調は暗灰褐色を呈する。外面には煤が付着する。口縁部下外面の突帯より以下は外型造りの痕跡を残す。底部外面中央に六角の枠の中に「式」の字が凸出して見られるが、これは本来は型の内底面中央に陰刻されていたものであろう。土師器皿(2)は口径6.8cm。胎土には金雲母片と黒色細砂粒を含み、色調は暗褐色を呈する。ほぼ完形であるが、灯火器にあるような煤の付着は認められない。

染付磁器碗(3)は端反り碗で、外面の文様は二重線による亀甲の上下を5本以上の平行線で囲む。

赤絵磁器碗(4)は梅花文様をあしらった枠を3単位赤色顔料で描いている。内底面にも赤絵文様があるが、残存状態が悪く明らかでない。(5)は白磁小碗で、口径6.0cm、器

高 2.9 cm。

陶器片手鍋 (6) は把手部分と外面口縁部より下に暗紫色、内面に暗黄褐色の釉が施されている。外面全面に煤付着。陶器碗 (7) は高台径 4.2 cm。底部と高台部分しか残存していないが、筒状を呈するものである。全体に緑灰褐色の地に茶褐色の斑文のある釉が施されているが、疊付部分は露胎である。陶器蓋 (8) は最大径 7.5 cm。天井部外面に淡灰褐

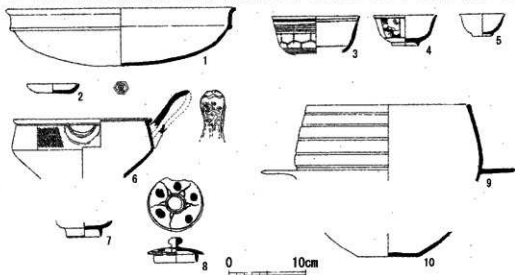


図 18 SE404 出土土器

色の地に鉄絵で五つの区画をつくり、各々の中に緑色の点を配する。陶器羽釜 (9・10) はともに内外面暗紫色の釉が施されている。(9) の口径 21.3 cm、鏝径 33.5 cm。(10) は同一個体と考えられるが、直接接合できないため、器高は不明である。いずれも外面に煤が付着している。

B 遺物

■ 土器 (中世前期)

SE203 出土土器 (第 2 図・第 3 図、図版 9・10) 土師器皿 (第 2 図 1~18) は口径 14.5~15.5 cm の大皿 (1~8) と口径 9.5~10.5 cm の小皿 (9~16) が圧倒的多数を占めている。大皿の調整は、成形ののち、先ず内底面にナデを施し次に体部上半から口縁部にかけて内外面同時ナデを行うものであるが、その回数が可視的には二度 (体部から口縁部にかけてと口縁端部) しか認められないものが目立つようになる。三度以上施す個体 (2 など) もあるが、ナデの範囲は前段階に比べると幅が狭くなっている。小皿はそれまで僅かながら認められた口縁端部を強くナデいわゆるての字手法の皿の系譜をひくものがなくなり、その成形については左手手法 (A 技法) とともに両手で行うために底がヘソ皿様に凹む形態となる B 技法が併用されるようになる。口径 18.0 cm の特大皿 (17) は数は少ないが、構

内遺跡 G 棟 SE05 や SK07 の出土例から、一定の法量の皿として存在することは確実である。14 世紀後半以降の多法量化した土師器皿中の特大皿につながっていくものであろう。

(18) は底部に糸切り痕跡を残す土師器皿である。従来糸切り痕跡を残す土師器皿は小皿だけしか知られていなかったが、大皿にも存在することが明らかとなった。(19・20) は台付き皿である。(19) の皿部分は器壁が比較的薄く、口縁端部をつまみ出すようにして成形している。(20) の台部は皿部が一部残存している。(19) とは別個体であろう。土師器土釜 (21~24) は口径 14.5 cm、胴部最大径 15.2 cm のもの (21) 口径 21.0 cm、胴部最大径 25.2 cm のもの (22) 口径 27.1 cm、胴部最大径 29.3 cm のもの (23) 口径 32.2 cm、胴部最大径 37.3 cm のもの (24) に分けられる。くの字状に外反する口縁と水平な鏝部、胴部最大径は鏝より下にくる。いずれも鏝部以下外面にススが附着している。菅原正明氏分類の大和 B1 型である。

瓦器碗 (第 3 図・1~4) は内底面の暗文がやや簡略化し、外面の暗文は口縁部のみ (1・2・4) が全く消滅したもの (3) も見られる。高台も貼り付け痕跡が明瞭となるものばかりであるが、不安定な坐りの悪いものはない。瓦器小碗 (5) は外面の暗文を残している。瓦器皿 (6~10) は口縁部内面の磨きは見られず、内底面のジグザグ状暗文だけである。(11) は瓦器土釜である。平底と考えられるが、断片なので詳細は明らかでない。

国産陶器 (12~14) のうち (12・13) は東播系須恵器捏鉢である。いずれも内面の使用痕が顕著である。灰釉系陶器片口皿 (14) は瀬戸のものである。

中国製輸入磁器 (15~21) は青磁碗 (15) は内面に白い細糸状の文様を残す。白磁碗 (16~20) は (16) が大宰府白磁碗 VII 類、(17) が同 VII-2 類、(18) が小さな玉縁をもつ同 II-2 類で、体部内面の分割線は外れてしまっている。(19・20) は同一個体で同 IV-1 類、(21) は白磁四耳壺の肩部から頸部にかけての断片である。

b 瓦

瓦は SE404 から近世瓦が多く出土しているが、他は少ない。ここでは中世前期以前の軒瓦にだけ説明を加える。(図 19, 図版 11)

(1) 均正唐草文軒平瓦 SK307 出土。興福寺式軒平瓦で、平城京軒瓦型式 6671-B に相当する。凹面平瓦部は布目の上から不規則なナゲが施され、凸面頸部・平瓦部は縦方向の縄目叩きが残る。

(2) 均正唐草文軒平瓦 SE203 出土。写実的な花菱文を中心飾りとして忍冬風の唐草文が 2 単位左右対称に展開する文様構成であるが、左半分しか残存していない。凹面は瓦当近くまで布目が残り、瓦当上面を横方向にヘラ削りしている。同系統の文様は興福寺

出土瓦中のⅦ期に多く見られるが、同じ文様構成のものはない。

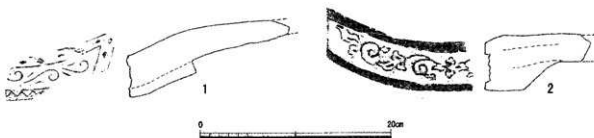


図 19 軒瓦 (H棟)

Ⅲ 中世前期の土器

1 土師器皿

中世前期の土師器皿は一般的な大皿で口径 14.0~15.0 cm、器高は 2.5~3.5 cm、胎土には比較的大きな砂粒が目立つ。色調は(淡)赤褐色あるいは暗褐色を呈するが、少数ながら灰白色のものもある。

土師器皿は瓦器碗に比べて研究の対象として取り上げられることが少ない。これは法量(特に口径)の変化以外は顕著な相違が見出せないと認識されてきたためであろう。また、瓦器碗に比べて地域差が大きいと考えられてきたせいもある。しかし、これについても、口径に関して構内遺跡(奈良盆地北部)と十六面・薬王寺遺跡(奈良盆地中央部)の比較を表 1 に示す。

表 1 十六面・薬王寺遺跡出土土師器皿との法量比較 (cm)

時期	構内遺跡			十六面・薬王寺遺跡		
	遺構	大皿	小皿	遺構	大皿	小皿
12世紀初頭	—	—	—	井戸 03 青粘土	15.9	9.8~10.6
12世紀前半	SK3103	15.0 前後	11.0 前後	土坑 01 下層	14.7~15.6	9.7~10.3
12世紀中葉~後半	SE05	14.5 前後	10.0~10.5	南 SE21 下層	14.5~15.0	8.7~10.2
12世紀中葉	—	—	—	—	—	—
12世紀後半	SE03	14.5~15.0	10.0 前後	—	—	—
13世紀前半	SE3131	14.0 前後	9.5 前後	—	—	—
13世紀前半~中葉	—	—	—	井戸 20(新)	13.8~14.8	8.8~10.2
13世紀後半	SE4030	12.5~14.0	9.5 前後	土坑 10 下層(古)	(12.5)	8.8~9.4
13世紀末	—	—	—	土坑 10 下層(新)	(11.5~12.3)	8.6~9.4

大皿の口径に関してみてみても、細かな数値の違いはあっても、12世紀が最も大きく、以後14世紀初頭にかけて漸次小さくなっていくという傾向は共通していると言えよう。ただ、胎土・色調や調整技法は肉眼で見ても違いが認識出来る場合があり、土師器皿が瓦器よりも狭い地域圏で生産されていたことを推測させるものである。

製作技法についてもあまり論じられるところがない。大皿・小皿とともにロクロは使わない、いわゆる手づくねと考えられており、稀に底部外面に糸切り痕跡を残す個体が大・小ともに認められるが、他地域の製品である可能性が考えられている。

以下では、中世前期大和の土師器皿が手づくねによって作られているという前提を立て製作技法をさらに詳細に検討し、古代の杯との関連や中世の皿としての変遷の実態を明らかにしていきたい。

先に、この時期に一般的である大・小の皿の変遷を示しておく(図21)。上述したように、中世前期の土師器皿は12世紀を頂点として口径が最大となり(15cm前後)、13世紀を通じて漸次縮小していくことが明らかである。これらの漸移的な各段階の絶対年代は従来良好な資料に恵まれなかったが、藤原宮75-7次調査SE8350出土の承安四年(1174)墨書曲物に伴う一括の中世土器との対比から、G棟SE03の土師器皿が12世紀後半であるとの見通しが立てられるようになった。

次に、こういった変遷中の画期について述べる前提として、大皿を中心に、その製作技法(成形・調整)について整理してみる。

中世前期の土師器皿の製作技法を概観すると、古代土師器の左手手法のように(右利き

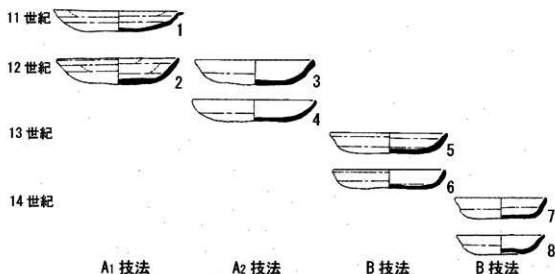


図20 古代末・中世の土師器皿変遷図





















	大皿	口径 (cm)	小皿	口径 (cm)
SK3103		14.4		9.6
SE05		15.4		10.8
SE03		15.0		10.6
SE3131		14.8		10.0
SK3130		13.7		9.4
SK2873		14.0		9.5
SK19		14.0		9.6
SE4030		14.0		9.4
SK421		13.0		9.4
SE07		10.6		9.0

図 21 構内遺跡出土土師器皿の変遷

の場合) 左上に粘土をのせて成形し、内外面の調整は左上で行うというもので、これをA技法とする。内外面の調整は左手七にある関係上、まず内底面にナデを施し、次に内面から外面へナデ(内外面同時ナデ)、次に口縁端を調整する意味で外面から内面へナデを行う。このうち口縁部内外面に3回以上のナデを施すものをA1技法、2回までのナデのみ

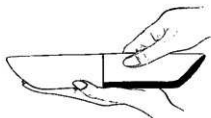


図 22 A技法模式図



図 23 B技法模式図

の場合をA2技法とする。A1技法の場合は調整に際して必要以上にナデを行っており、これを10世紀以来のe手法の系譜を引くものであると考えた。いっぽうA2技法はe手法の系譜上にはなく、口径の大きな土師器皿を掌上で作り出すのに伴って用いられたもので、A1に比べて実際的であると言える。

しかし、13世紀に入ると、両手によるおおまかな成形のあと、外側から内外面にナデを施して口縁までさらに成形した皿を、板あるいは皮革状物質の上のせて内面主体の調整を行う。最後に内底面の調整のために内面をナデ上げるようにするというものである。これをB技法とする。先に強いナデで口縁部を形成しているために(親指内面、人差し指以下外面に)底部が押し上げられる傾向が強い。いわゆるヘソ皿タイプのもので出来る。この技法は口径の大きな皿の製作技法には適さない。

13世紀から14世紀前半にかけての土師器大皿の口径縮小はこの技法の採用と大いに関係がある。さらに14世紀後半から15世紀前半にかけての土師器皿もB技法によるものであり、その後は近世初頭まで形を変えながら継続される可能性はあるが、15世紀後半～16世紀中葉にかけての様相が今のところ明らかでない。

以上のような製作技法変化に対する把握の上に立って、中世前期土師器皿の変遷中の画期を次のように設定した。

1期 11世紀中葉～12世紀前半

古代の杯から中世の皿への漸移的な移行期である。背景には土器様式中での碗と皿の組み合わせが明確に意識されてきたことがある。さらに、その背後には漆器の碗・皿の存在が想定できよう。

最初の章で述べたような中世前期のはじまりを土器から説明しようとする試みの延長上

では、少なくとも大和北部（南都およびその周辺）では律令的土器様式の終末と中世的土器様式のはじまりは、

○上師器杯形態の完全な消滅

○碗形態の瓦器のみへの集約

の2点をメルクマールとすることが出来よう。

Ⅱ期 12世紀中葉～13世紀中葉

中世前期土師器皿の大量生産の時期であり、大皿はこの時期に最も口径が大きくなる。大皿の制作技法は内面と口縁部外面に入念なナデを施すA₁技法が最初は主体で、12世紀後半になるとナデの回数を省略したA₂技法が主体となる。A₁技法を10世紀以来のe手法の退化の延長線上に位置づけるとすれば、古代の杯がこの段階まで残っていたと考えるべきであろう。

Ⅲ期 13世紀後半以降

Ⅱ期に続いて大量生産が行なわれるが、量的に若干少なくなる。大皿の口径は漸次縮小していくが、それに伴って指掌や皮革上の成形を中心とせず指主体で成形を行っていくB技法が次第に一般的となる。14世紀にはB技法が主体となり、中世後期の土師器皿に受け継がれていく。

なお、中世前期の土師器皿には一般的な大・小以外に、僅かであるが法量が規格外のものが見受けられる。構内遺跡では画期のⅡ期にあたる12世紀中葉以降に散見され、SE05の口径17.0～17.5 cmのもの、SE203の口径18.5 cmのものなどがある。これら「特大皿」と言うべきものを土器様式の中に含めて考えることが出来るとすれば、やはり14世紀中葉以降に見られるいわゆる赤土器・白土器の中にもまた「特大皿」が存在することと同じ様相である可能性が高い。中世前期において「特大皿」が僅少なものは土器だけでは判らない木器や陶磁器も含めた「かくれた食膳具」のセット関係の一部を形成していたとも考えられる。SE203 出土の土師器皿が木製のいわゆる挽物皿に類似しているのもこの仮説を補強すると言えよう。

しかし、この時期には一般的でなかった多法量の皿からなる食膳具のセットも、13世紀後半～14世紀中葉の試行的段階を経て、日常生活の食器のセットとして定着してくるのである。

2 瓦器碗

瓦器碗は上師器皿とはちがい、編年を中心に実に多くの論考が発表されている。編年においては様々な指標が提示されたが、つまるところ、説得的なものは器高指数（口径と器

高の比率)であり、土師器皿同様、口径の大きなものから次第に縮小してゆくと言う大きな傾向は変わらない。その他の属性(高台の形態・内底面の暗文等々)は必ずしも絶対的な条件ではない。

ここでは13世紀後半以降の瓦器碗が小型化していくうえに歪みを生じるものが多いという事実を瓦器碗編年の一つの画期ととらえ、いちおうの相対編年を以下に試みた。なお、13世紀後半以降、消滅するまでの瓦器碗の実態については後に述べることにする。

初現期 11世紀中葉～12世紀前半

別稿で設定した碗形態が未だ瓦器に集約されていない時期である。土師器皿に即して言えば、杯形態が残存している時期でもある。個体としての瓦器碗は半球形の体部で器壁は薄いものが多く、内外面の磨きは密であるが、他地域と比較して外面がやや疎らかなのが特徴と言えよう。11世紀代は良好な資料に恵まれないので、やや新しいSE2792出土の個体によれば、器高指数は38.46である。この時期は出土量が少なく、完好な資料も限られていることもあって、実態の不明な部分が多い。

次の時期と区分する指標は高台の形態であろう。高台は貼付けて成形するが、さらに外方につまみ出し、すわりを良くするように仕上げられているものが多い。

大量生産の時期 12世紀中葉～13世紀後半

初現期と違って出土量が飛躍的に増加する時期である。しかし、この時期のなかで、器形の歪みという瓦器碗自体の大きな変化が起きる。これを画期として区分すると、

第1段階 器形の歪みのない時期 12世紀中葉～13世紀前半

第2段階 器形の歪みが目立つ時期 13世紀中葉～13世紀後半

に分けることが可能である。ただし、第2段階は遺構によって瓦器碗の割合が非常に少ない場合がある。したがって、大量生産の時期は、厳密に言えば、13世紀中葉までかもしれない。

第1段階 12世紀中葉～13世紀前半

瓦器碗が土師器皿とともに大量出土するようになる時期であるが、碗自体は器高指数が漸次減少し、すでに指摘されているが、内外面の暗文・高台の成形とも簡略化が目立つ。高台はもはや前段階のように貼付後外方につまみ出さず、断面三角形を呈するものが多いとなり、すわりの良くないものが増えてくる。このような製作技法の簡略化と大量生産は表裏の関係にあると考えられるが、大量生産を必要とするようになった瓦器碗・土師器皿を中心とする食膳具の変化と広範囲な普及の実相を明らかにすることが今後の重要な課題であろう。










		口径 (cm)	器高 (cm)	器高 口径 (不測点以下第4 位を四捨五入)
SE2792		15.4	5.8	0.377
SK3103		14.4	6.0	0.417
SE05		15.3	5.4	0.342
SE03		14.8	5.2	0.351
SE3131		14.6	5.2	0.356
SK3130		13.0	4.6	0.354
SK2873		13.1	4.0	0.305
SK19		13.2	4.2	0.318
SE4030		12.2	4.0	0.328

図 24 構内遺跡出土瓦器碗の変遷

第 2 段階 13 世紀中葉～13 世紀後半

瓦器碗の規面性がなくなり、器形の歪みが著しくなる時期である。器高は 4.0 cm まで低くなり、内面の暗文は疎らとなり、外面は口縁部付近に残存している。高台の大部分は器が安定するように作られていない。遺構から出土する量も前段階のように大量である場合もあるが、土師器皿の量に比してほとんど出土しない場合もある。

これは、それまで食膳具の中心的位置にあった瓦器碗が、もはやその機能を必要とされなくなった結果であると考えられる。

瓦器碗がその本来の役割を果たさなくなった 13 世紀中葉以降における食膳具の様式は、

従来から言及されているように、木製の食器（漆器）の量産と普及が大きな比重を占めていることは想像に難くない。その実相については、中世前期末のこの時期において、食膳具の多様化・多法量産が進行していることを前提とすると、木器（漆器）による碗・皿の食膳具とともに従来からの土器が混在する状態であったと考えられる。すなわち、普及は進んでいるものの未だその浸透が充分でない木器（漆器）と、その中心的な地位を失ったものの従来の生産と供給の体制を維持し続けようとする土器（瓦器碗・土師器皿）でもってこの時期の食膳具の様式が形成されているのである。このような中で、瓦器碗はそれまでの食膳具の中心たる「碗」の地位を失い、漆器碗を中心とした多様・多法量産食膳具の器種の中の一つ（器種）となってしまったのであろう。もはや13世紀中葉以降瓦器「碗」は碗（食膳具の中心としての）と言うべきでないとも出来る。

14世紀以降の瓦器「碗」は構内遺跡SD06（旧三条七坊、14世紀前半）に見られる浅鉢型のものと同SD431（14世紀後半）出土の半球形を呈するものがある。前者は形態的にはそれまでの瓦器碗の退化の延長上にあつて、数量的には僅少で、後者はやはり僅少であるが、12世紀後半ごろから見られるミニチュア瓦器碗の系譜上にあると考えたい。

これは、14世紀に入ると木器（漆器）碗・皿、土師器皿（大・小）それに中国製輸入磁器も加わって、多法量産する食膳具をまかなったためである。さらに、15世紀後半以降は国産陶器が土師器に代ることが多くなり、17世紀に入ると国産磁器の発明によって近世・近代的な食膳具への移行が完了するのである。

古代では日常雑器の主流は土器であり、土器様相の変化を辿る場合は、土器のみで考えれば事足りていた。僅かに7世紀以降の土器（主に須恵器）で金属器模倣と言う概念が提唱され、土器の器形はそれ自体の中で発展してくるばかりでないことが明らかとなった。

中世ではこういった「上物写し」の現象はさらに複雑となり、食膳具の様式の変化や土器の占める割合の後退（木器の普及）などと相俟って、もはや土器だけで中世食膳具の様式を考えることは出来ない段階に至ったのが中世後期であると言えよう。

IV 構内遺跡中世前期の遺構の総括

1 中世前期の総柱建物遺構について—「集落論」と歴史時代の考古学— 類型化の前に

考古学的に確認される居住の痕跡の集合体すなわち居住遺跡群を集落と呼んでおくことにするが、こういった集落資料の分析を通じて中世地域社会の構造を解明していこうとするのが中世集落論である。

中世集落の中核をなすのはもちろん個々の建物遺構である。考古学上の他の時代同様、

これらの建物遺構（住居址）の各々の特性や配置のあり方を検討することによってその遺跡に居住した集団の性格を究明していくことが方法論的原則であろう。したがって、中世集落論においても建物の規模・数・配置を基準とした分類が行われることが多かった。いわゆる類型化論である。

しかし、中世は、古代と比べてみても、その社会構造の複雑さ、階層の多岐にわたる様相、さらに地域ごとの個性の強さは歴史学の他分野での研究で明らかにされてきたことである。こういった複雑多様な中世社会を考古学的な操作によって理解しようとする場合、いきなり原則的な類型化から入っていったのでは限界があることが判る。

確かに類型化は考古学における資料操作の基本であるが、発掘調査を通じて得られる集落遺跡の情報は遺構・遺物だけではあまりに不足していると言わざるを得ない。このような考古資料の限界を補うために必要なことは、中世の場合は第一に遺物を通じた時期的限定であり、第二に歴史学の他分野（主として文献史学）による地域の歴史像把握を前提とした遺跡・遺構の位置づけの考察であろう。第一は遺構や遺物の残存状況によって大きく左右されるが、第二は未開拓な部面が多い。これは文献史学や歴史地理学その他によっても在地社会の詳細な動向を十分に再構成できないのが実情であるためであろう。このように中世集落を論ずるためには「時期的限定」と「地域的限定」の操作を行ってはじめて、時期ごと地域ごとに「類型化」を行うべきであろうと考える。

考古学の対象となることが多いのは主として中世の在地における集落遺跡である。中世前期においては、ほとんどが農村の景観形成の一端を担っている。都市は平安京・南都・鎌倉・平泉・博多などで、中世後期の町場に相当するものは未発達であった。

中世の複雑さとはとりもなおさず在地における支配関係の複雑さである。古代以来の七堂伽藍を備え、教学・布教の中心であった興福寺もその中に院家という貴顕の論理で動く僧侶の集団を出現せしめ、その在地支配構造や寺院自体の運営法式をも変化させてしまったことは上述した通りである。

しかし、何といても中世の複雑な様相をうかがうことが出来るのは農村の在地であろう。そこには農業経営を行う主体としていわゆる屋敷地がしばしば考古資料として登場してくる。中世前期の屋敷地はその規模・内部の建物配置だけをとりあげても様々な様相があり、建物構造の検討や出土遺物によってその性格を特定するには限界がある。したがって、上に述べたような時期的・地域的限定を踏まえた上での集落のそれが属する遺跡の中での総合的検討が必要とされるであろう。

構内遺跡でも東西4間、南北5間の比較的規模の大きな総柱掘立柱建物 SB03 (SB3161) をはじめとして何棟かの建物が知られているが、遺構や遺物それ自体ではそれらの性格を

特定は出来ない。しかし、上に述べたような興福寺の西北辺という地理的特質、木簡から推定出来る識字層や聖職者の存在などから、この中世集落遺跡のだいたいの性格を把握することは出来る。さらに、小堂宇の存在も推定が可能となり、『山槐記』の記述もこれを裏付けている。

中世総柱建物の出現とその時期

ここで言う中世総柱建物（礎石建物も含む）とは母屋の中に複数の柱穴を有する倉庫でない建物遺構のことで、概して柱および柱穴の規模は小さく、古代のように柱がある程度大きく母屋の中に柱を持たないかあっても1・2箇所だけのものと区別される。また、その柱穴配置は基盤目状に全て配されている場合以外に、一部を欠いたり柱間を短くしたりする場合もあり、内部の間取りが複雑であることをうかがわせる。また庇のつく場合も少なくない。

中世の総柱建物が注意されたのは1975～79年の大阪府和泉市和気遺跡の調査からであろう。ここでは13世紀の堀や土塁で囲まれた36×30mの区画内に7間×3間の大型建物を中心に7棟以上の総柱建物が配置され、東側に接する別の区画でも6間×3間（4間？）の大型総柱建物が存在する。少なくともこれら大型建物は倉庫ではなく、居住空間の中心的存在であった事は確かである。

このような総柱建物の解釈に対する再検討はそれまでの中世集落論に見直しを迫ることとなり、大阪府高槻市宮田遺跡でも従来倉庫と考えられていた総柱建物の新たな位置づけが必要とされている。

総柱建物自体は古代から存在する。法隆寺伝法堂や藤原豊成邸など住宅建築の例が知られているが、これらは床張りと考えられ、土間あるいは埴敷き主体の宮殿や大寺院の遺構が発掘例の大多数を占める中では稀少であったと言える。しかし、平安時代になって寺院や貴族の邸宅も多様化し、とくに寺院の小規模なものが総柱建物を取り入れるようになった。嘉祥元（848）年ごろに藤原順子を願主として創建された京都市山科区の安祥寺上寺（図25）は標高約350mの幅狭い尾根上を造成して建てられた山岳寺院であるが、五大堂・礼仏堂・東西僧坊・方形堂といった中心建物は現地踏査や地形測量・ボーリング調査の結果、総柱の礎石建物であったことが明らかになっている（礼仏堂は推定）。

こういった新しい寺院形態に伴う新たな建築技術は安祥寺上寺のような寺院建立（上層貴族の邸宅建設も同様か）をきっかけに伝播・拡散していったと考えられるが、一般集落の様相をもつ遺跡ではいつごろから出現するのであろうか。

平城宮馬寮上層遺跡（図26）では、馬寮廃絶後の平安時代に入ってから建物の時期をA・B・Cの三期に分けている。このなかで、A期は規模の小さなものばかりであるが、総

柱のものは1棟もない。B期になると、SB7030のように身舎中に総柱とそうでない部分があり、一方向に一部分だけ庇を構えているものが出現する。次のC期には総柱建物は個々の規模も大きく、他の建物と群を構成するようになる。

SB7026・SB7060は互いに南北に並んでいて、区画施設こそ明らかでないが、居住単位を構成していると言えよう。報告書には年代が明示されていないが、SB7026が「続西僧坊」すなわち10世紀末を上限としていることから、B期は10世紀中葉あるいは前半にまでさかのぼる可能性がある。

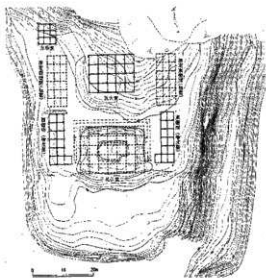


図 25 安祥寺上寺遺構

大阪府箕面市粟生間谷遺跡(図27)では、やや大きな不整隅九方形の柱穴からなる規模の大きな(約125㎡)建物45が9世紀と考えられている。この建物は南面し5間×2間の身舎に北側をのぞく3面に庇を設けている。南面は縁の可能性もあり、身舎も部分的に床が張られていたかもしれない。10世紀前半になると、建物143は基本的には南面する4間×2間の母屋に西・南の二面に庇がつく構造と考えられるが、母屋の中にも複数の柱穴があり、複雑な構造が想定される。建物の構造に関してはこの他にもいろんな解釈が可能であろうが、建物143の柱掘形の形態などから、古代的な建物45から中世総柱建物の先駆を思わせる建物143への変遷を跡付けることが出来よう。

大阪府貝塚市沢城跡では5間×2間以上の総柱建物SB1は11世紀のものとしてされている。市域では加治・神前・畠中遺跡を中心に9世紀の建物が多く知られているが、いずれも身舎内に柱をもたないものばかりである。これらは何らかの官衙に伴うものと考えられている。貝塚を含む和泉南部地域では、10世紀の建物遺構は今のところあまり知られていない。総柱建物が本格的に展開するのは中世前期(12・13世紀)に入ってからである。

この他にも播磨・摂津・紀伊・丹波・山城などで報告例があり、10世紀にさかのぼる可能性のあるものもいくらかあるが、共通した特徴は中世前期に入ってから本格的な展開が見られるということである。

馬寮上層遺跡は平城宮廃絶後の遺跡であるが、この時期(9世紀)には現在の宮第一次内裏後方に超昇寺が建立されている。すなわち貞観二(860)年には「不退超昇両寺」に平城京中の水田が施捨されており、同四(862)年には超昇寺の堂舎を旧に復している。超昇

寺は平城天皇の皇子高岳親王の、不退寺は同じく阿保親王の建立した寺で、このうち後者は『江家次第』などにもあるように平安京から南都へ赴く際の主要ルート上にあり、現在まで存続している。超昇寺は高所親王（真如法親上）が平城上皇を弔うためにその陵辺に建立したもので、現在はその痕跡を留めないが、9世紀後半以後しばらく存続したとすれば上層遺跡はその周縁部に位置することとなる。

9世紀の新たな寺院の建立や堂舎の形態を、安祥寺上寺のありかたをもとにして、総柱（礎石）建物を用いた比較的規模の小さなものであるとすれば、復旧された超昇寺も同様であったと考えられる。そして次の段階には寺の周縁部でもこの建築技術が取り入れられたのであろう。

粟生間谷遺跡も清和太上天皇と関わりの深かった箕面市勝尾寺の周縁部に存在し、元慶四（880）年の上皇行幸など総柱建物の建築技術が伝わる契機は十分にあったと考えられる。

貝塚市域をはじめとする和泉南部地域はやや遅れるが、これは熊野行幸がこの地域にその文化を及ぼすのを待たねばならなかったのであろう。

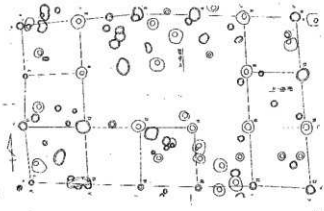


図27 粟生間谷遺跡建物143

ような院家がそれまでよりも多く設けられるようになり、その建設に用いられた技術のなかに平安京で採用されていた総柱建物があったと考えられる。このように13世紀以後の院家は構内遺跡の存在する地域の歴史に新たな展開をもたらす原動力となったのではないだろうか。

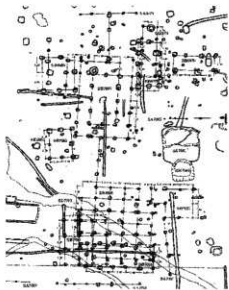


図26 平城宮馬寮上層遺構

構内遺跡で総柱掘立柱建物が一般的となるのは13世紀になってからで、10世紀にはまだなおG棟SB01のように古代的な構造の建物が建てられていた。これは後述するように、この地域が佐保殿・宿院などの平安時代初頭から続く藤原氏のための宿泊施設であったため、平氏の南都焼討ちによってこれらがようやく終焉を迎えるのである。以後は叡尊の叡浄院のよ

2 構内遺跡の遺構変遷

ここでは、前章で得られた土師器皿・瓦器碗の編年観にもとづいて、構内遺跡で検出された中世前期（12・13世紀）の遺構の変遷を時期ごとに概観する。

12世紀後半

SE202・203の時期に埋まった遺構はG棟SE03、講堂SE2788・2797があり、いずれも井戸であって、これ以外は小土坑や小穴のみである。建物跡はG棟SB03（新B棟SB3161）がこの時期にはじまる可能性があるが、他の掘立柱建物は明らかでない。交流会館SX351・352はいずれも焼けた瓦・壁材・土器片を含む焼土の堆積であり、東側のSX352は地山を基壇状に高く残したSX353とこれを区画するSD331・SG361に伴ったものであると考えられる。これら北

小路町の寺院遺構は、焼土が後世に動かされていることもあり、年代を確定する資料に欠けるが、SG361出土の土器から、12世紀後半が存続の画期であるということが出来る。

この時期の遺構の全体像については、井戸の存在を居住遺構の一単位と考えれば、旧地形による佐保川に近い低い地点で密であり、標高の高い興福寺寄りの安定した尾根上とその周辺では井戸の分布は疎らであると言える。これは、北小路町の寺院跡のように比較的広い面積を占める施設を標高の高い地域に設け、川に近い低い地域を日常生活的な居住単位とした結果と考えられる。言い換えると、旧地形尾根上の奈良時代以来の安定した地点に目的域たる興福寺関連の寺院施設を設け、それより低い当時としてはようやく安定した扇状地状地形の末端に寺院関連施設を支える機能域たる居住単位を設定したのであろう。

次の時期との関連でみてゆくと、トイレ遺構は今のところ確認されていないが、G棟SG01はこの時期からあった可能性が高い。またSE202出土のひらがな墨書土器から識字層の存在を知ることが出来る。寺院遺構に関しては、池SG361はいったんこの時期に埋まり、その後13世紀前半に堤SX355を築いて掘り直されたが、すぐに埋められた。

なお、この時期よりも若干古い時期（12世紀中葉）の遺構も存在する。G棟SE05・F棟SE2841・交流会館SE112であるが、いずれも井戸であり、SE2841以外は尾根状地形の安定した場所に立地している。

13世紀前半

比較的規模の大きな総柱建物SB03（SB3161）はこの時期を中心に存続していた可能性

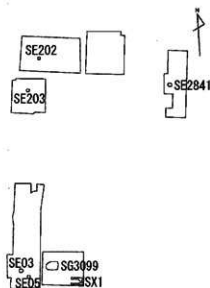


図28 構内遺跡12世紀の遺構

が高い。他にも F 棟 SB2860・講堂 SB2818・SA2820・G 棟 SB04 もこの時期の可能性がある。

佐保川に近い地点での居住の痕跡は比較的疎らとなり、居住の中心は興福寺に近い安定した尾根上に移っていったと言える。

建物遺構には同時期の井戸（G 棟 SE04・講堂 SE2799）も伴うと考えられるが、何よりも大きな特徴はトイレ遺構（SE3131）と遊水池たる大きな池（SG01）が伴うことである。これらの遺構の概要や性格についてはすでに述べたが、これらにゴミ捨て穴（G 棟 SK07・12 など）を加えて、生活と廃棄物処理や廃水などの環境保全といった体系的な居住が計画的に行われたと評価することが出来る。

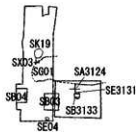
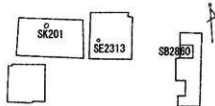


図 29 構内遺跡 13 世紀の遺構

前時期に続いて居住者のなかに識字層が存在したことは、SE3131 出土の木簡によって知られる。また、SE3131・SD3102 の花粉分析の結果は付近での畑作を示しているが、確実だとしても、それほど規模の大きなものではないであろう。

北小路町の寺院跡については、SG361 の南側に造られた堤 SX355 は含まれている土器が 13 世紀前半の瓦器・土師器皿であることから、SG361 だけはこの時期まで存続したと考えられる。しかし、その上を瓦葺建物が焼失した堆積を平坦にした整地 SX352 が覆っていることから、あまり長くは続いていないと考えられる。

13 世紀（中葉）後半

13 世紀後半以降と考えられる建物跡が散見されるが、確実にこの時期と考えられるものはなく、小規模なものばかりである。しかし、前時期同様、トイレ遺構（G 棟 SK19、新 E 棟 SK201）も伴っている。SG01 も機能を続けており、この時期の井戸 E 棟 SE2313、SE4030 の位置から、再び居住遺構が川の近くまで拡大していることが知られる。また、識字層の存在も続いていることが SK19 出土の木簡によって判る。

13 世紀は興福寺の外郭という基本的な性格を保持しつつも、掘立柱建物・井戸・トイレ・ゴミ捨て穴（土坑）・有効的な排水・遊水施設としての池が配置された自己完結的な生活空間がいくらかの単位で展開されていたと推定出来る。それは中世の南都という都市で生活する様々な課題（住居、水・ゴミ・し尿）を、（この場合は）寺院およびその機能域において、小さな居住単位ごとに解決していこうとする試みの結果に他ならない。

もちろん、このような様相は興福寺だけでなく南都の他の寺社や権門の居住地でも見られたことであろう。これはこういった課題を解決するための機能を本来的に持ちあわせていない古代都市との大きな相違であると言える。

しかし、このような小宇宙的な都市課題解決には自ら限界がある。その解決が都市の機構改革や都市の外に求められるようになるのが中世後期である。都市の機能を維持するために、生活課題を解決するための専門的な役割を担う階層（例えば唱問）の創出や政治・文化・生活技術などあらゆる面での他地域との交流がそれまでのような都市生活形態を不可能にしたと考えられる。

講堂 SK2802 は播鉢状の形態の大土坑で、トイレの可能性はあるが、使用を伺わせるような堆積はなく、遺物も播鉢の傾斜面に 14 世紀の土器が僅かに残る程度であった。これは 13 世紀と同じような生活形態を行おうとしたが、何らかの事情で存続が不可能になり、この大土坑が廃棄されたと考えられる。

3 興福寺西北辺の特質

境内遺跡で検出された中世前期の遺構は、総柱掘立柱建物・井戸・ゴミ捨て穴・トイレ・池などの一般の生活のための居住遺構と北小路町で検出された瓦葺建物を中心とした寺院遺構である。

このうちの居住遺構は、12 世紀と 13 世紀では様相が異なることはすでに述べた。寺院遺構は、後述するように 12 世紀後半に焼失した可能性が高く、やはりこの地域の歴史的特性を考える手掛りを提供していると言える。

北小路町の寺院遺構は、2 箇所瓦・壁材・土器片・焼土の堆積 (SX351・352) がいずれも瓦葺建物が火災により倒壊した結果と考えられるが、瓦の出土状態にまとまりがなく、堆積中に新しい土器も僅かながら含まれていることから、後世 (14 世紀?) の整地の際に若干動かされている可能性がある。しかし、付近に瓦葺建物があつたことは確実で、出土土器も瓦器碗・大型盤・土師器皿のほかにも中国製青磁碗・皿 (龍泉窯系・同安窯系)・青白磁合子・黄釉 (鉄絵) 陶器盤など質量ともに豊富である。

また、SX352 を除去した時点で東西に長い不整形の池 SG361 が検出された。この池とその西側で検出された南北方向の溝 SD331 とが組み合せて区画を形成していると考えられる。SG361 の南岸に沿って、土器・瓦を細かく破砕し、それらを黄灰褐色の粘質土でつき固めた土堤状の施設が検出された。SG361 の護岸施設と考えられ、SX352 はその上におおいかがさっている。さらに、この護岸は池が埋まった時点 (12 世紀後半) 以後に築かれたことが断面観察から伺うことが出来る。

このように、層位と出土遺物からはこの寺院遺構が12世紀後半に火災によって廃絶した可能性が最も高いが、この遺構で最も多数出土している瓦の年代観はそれを裏付けるものであろうか。2箇所のみ瓦積と1箇所の後世の井戸から出土している軒瓦のうちで、軒丸瓦は3型式(第Ⅰ～第Ⅲ)、軒平瓦は5型式(第Ⅰ～第Ⅴ)に分類出来ることはすでに概報Ⅴで報告済みである(図30)。ここでは各文様型式について、文様系譜や同范関係のその後には得られた知見を述べてみることにする。

軒丸瓦はいずれも内区主文が左巻きの二ツ巴文で、外区に珠文をめぐらせている。

第Ⅰ型式は瓦当径が大きくて文様も量感があり、外区珠文の数は16個である。瓦当面中央をやや外れた位置で、周縁から巴文様を3箇所横切り反対側の周縁にまで至る范割れ痕跡が大きな特徴である。同じ特徴をもつ軒丸瓦は薬師寺で知られていて、照合を行ったところ、上述の范傷や珠文と周縁を結ぶ范傷が一致した。薬師寺の例が個体数が少なく、断片のものだけであるので、范傷の進行による前後関係の確定には至らなかった。

第Ⅱ型式は瓦当径がやや小さく、文様も平面的で若干の歪みを生じている。外区の珠文は17個である。このような特徴からやはり薬師寺に同范の可能性が高い例があるが、こちらも断片であるため前後関係等は不明である。

第Ⅲ型式は小さな頭部と細長い尾部が特徴で、しかも、第Ⅱ型式のように尾部が伸びて界線を兼ねていなくて、第Ⅰ型式同様、明瞭に界線が存在している。珠文数は16である。瓦当部は他の型式に比べて薄く、丸瓦部が外れている個体が多い。外区珠文の一部に范傷が認められるが、今のところ、同范例は見出していない。

軒平瓦は瓦当文様が型式ごとに異なる。各型式中で同文異范が存在するかどうかは厳密な検討を行っていないが、第Ⅰ・Ⅱ型式に関しては、全て同一范であり、その他の型式も同様である可能性が高い。

軒平瓦第Ⅰ型式は下向き半載花文状の文様を中心飾りとし、左右に3回反転する唐草文をもつ。唐草のうち左側3単位目が周縁によって途切れており、范を左右に縮めた可能性がある。後述する薬師寺の同范例から、中心飾りは半載花文でないと判明し、文様系譜を再検討しなければならない。下向きC字状中心飾りの可能性も考えられる。

同范と考えられる例は興福寺と薬師寺にある。興福寺のものは左側第2・3単位周辺の断片であるが、薬師寺では瓦当面がほぼ完存している例(図31)があり、中心飾りや唐草文細部の特徴が一致することから同范と認定した。しかし、薬師寺での中心飾りが残っていてこの型式と判るもの7点のうち、内区の上下幅に注目すると、計測出来るものは3.2～3.3cmであった。いっぽう第Ⅰ型式のそれは2.7～3.0cmで、中心飾りの上部が欠けていることなどから、范の上ドをやや切り縮めていると推定される。また、薬師寺例は内区文様が肉

厚ではっきりしており、北小路町寺院跡に范の使用が先行すると結論して差支えないであろう。

軒平瓦第Ⅱ型式は竹葉状の半截花文を上下交互に5単位配した文様で、右から2単位目の花文の中央の花弁の先端が范傷で埋まっているのが特徴である。同范の可能性のある例はやはり興福寺と栗師寺にあるが、上述の范傷の進行はいずれも認められない。興福寺例は断片であるため断定が困難で、栗師寺例は花文各単位の表現は酷似しているものの右端の花文と周縁との位置関係に決定的な相違があり、范の彫り直しも認められないところから、同文異范の可能性が高い。

軒平瓦第Ⅲ型式はやや崩れた花菱文を中心飾りとし、花文をあしらった唐草文を左右に2回反転させた宝相華唐草文から成る。

中心飾りの両側に垂下する錨状の文様は、本来の文様を考えれば、明らかに唐草文様第1単位であり、両側の第2単位の中途に見られる楕円形文様は本来は忍冬状の花文である。同范の可能性のある例は興福寺と春日東塔から出土している。前者(図32)は中金堂にとりつく東側の回廊とその前庭部の発掘調査での出土で、文様の特徴がよく似ている。しかし、断片のうえに磨滅しているので認定は困難である。おそらく同范であろう。後者はやはり細部の文様の特徴が一致し、范傷などの決め手に欠けるが、同范と考えてよい。

軒平瓦第Ⅳ型式は均正唐草文であるが、本来の均正がかなり崩れて樹枝状の幾何学的な文様になっている。このタイプは北小路町以外の構内遺跡でも出土しており(E棟・F棟)、軒丸瓦も含めた他の型式との相違点であるが、いずれも組み合う軒丸瓦が特定出来ない。

現在のところ、このタイプとの同范例や同文異范例は発見されていない。

軒平瓦第Ⅴ型式は連珠文であるが、断片ばかり5点しか出土していないので、文様の完全な復原が困難である。左右両端の2個の連珠の間隔が他よりも狭いのが特徴的であるが、未だ同范例が発見されていない。

以上の型式の軒瓦は古代以来の興福寺主要伽藍の大黒根に使用された軒瓦に比べると、やや小ぶりなものであることが判る。これは寺院の機能とその運営、七堂伽藍以外の院家や小堂宇を中心に多様化してきたことを示すものである。

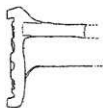
実年代については、軒平瓦第Ⅱ型式と同文あるいは同系譜の文様をもつ軒平瓦が藪中五百樹氏による瓦編年では治承の兵火以前、大治五年の大湯屋再建以後(1130~1180)とされている。これは同系譜文様で軒平瓦第Ⅲ型式よりもやや大型であるSE202州十軒平瓦が12世紀後半の瓦器碗・土師器皿を伴っており、これより新しくならないという事実とも矛盾しない。

他の型式に関しては、各自それぞれ実年代を求めうる資料を持ち合わせていないが、北

軒丸瓦



I 型式



III 型式



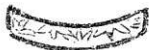
II 型式



軒平瓦



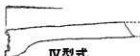
I 型式



II 型式



III 型式



IV 型式



V 型式

图 30 北小路町寺院跡出土軒瓦

小路町寺院跡で軒平瓦第Ⅱ型式と同時に使用されていたという事実からすると、やはり 12 世紀後半、それも 1180 年以前という年代を与えて大過ないと考えられる。

以上のように、北小路町寺院跡の遺構と出土瓦の検討からは 12 世紀後半という年代が導き出されることになった。また、瓦の時期ではあるが 1180 年の平氏の南都焼討ち以前であることも示唆的である。



図31 薬師寺出土軒平瓦Ⅰ型式



図32 興福寺出土軒平瓦Ⅲ型式

すなわち、この寺院は南都焼討ちによって焼失した蓋然性が非常に高く、それがそのままこの構内遺跡の存在する地域の遺構変遷の大きな画期となっているのである。この寺院が焼失して以後、13 世紀に入ると規模の大きい総柱建物を中心に井戸・ゴミ捨て穴・トイレ・遊水池の役割の池といった遺構が少なくとも 100 年は展開する。これらのうちトイレ・遊水池は 12 世紀にはなく、都市の存続にとって必要不可欠と認識できるこれらの遺構が居住空間に計画的に配されていることがこの時期の都市・南都の特徴であるといえよう。都市はこのようなみずからを存続させるシステムを備えていることが都市と定義されるので、南都の 13 世紀においてはそれが考古学的に確認されたわけである。

今、「興福寺西北辺」と漠然と一括された構内遺跡あるいはその中の特定の遺構を文献史料に見える個別の地名・人名と結び付けて考えることは慎重でなければならない。しかし、北小路町の寺院跡の焼失が平氏の南都焼討ちによるものらしいこととその前後（12 世紀までと 13 世紀）では遺構の様相に違いがあることは明瞭な対応関係があると言ってよいであろう。あえて論を進めて言えば、12 世紀までは「宿院」的な興福寺西北辺、13 世紀は新たな都市様相をもつ興福寺西北辺とすることが出来よう。

V 平城宮・南都・奈良町

1 平城京から南都へ

都市を考古学的に述べれば、ゴミ・し尿・上下水道など、人間が都市的生活を営む場合に抱える課題に対する解決、すなわち自己を維持するための恒久的なシステムをその中にもっているものであるといえよう。平城京も南都もこれらを備えていることは間違いないが、システムのあり方に対する基本的な概念が、古代と中世（以降）とでは異なっていたとすることができる。

平城京をはじめとする古代都市の場合は、ゴミもし尿もすべて「水に流す」というのが基本的な概念であった。ゴミ捨て穴や廃棄戸は、その場所での生活を他に移す際に利用されることが多く、生活空間が機能しているうちは使われなかったと考えられる。したがって、平城宮・京の場合は、溝の整備と維持管理が十分になされていなければ、宮内基幹排水路、東西堀河を通じて自然河川に排水することができた。

これが中世南都になると、さすがにゴミ・し尿による環境汚染を意識したのか、不完全ではあるが、生活空間の中で自己完結するシステムを考え出したようである。まず、し尿は溝や川に流すことを考えずに大きな土坑を掘ってそこに貯めた。以後の都市のし尿処理の先駆と言えよう。

これは、下水がし尿処理と分離したことを意味する。これとともに生活空間の排水、例えば大雨の時の大量出水に対する処理なども合理的に考えられるようになった。

ゴミは古代以来の水に流す方法や穴を掘って埋める方法も用いられたが、災害などによる大量のゴミの出現に際しては整地土の一部として、その端に積み上げる方法がとられた。この方法は中世後期や近世まで続く。

2 中世都市南都の再生 —北小路町寺院遺構—

このような都市的生活基盤の上に立って、中世南都がさらなる展開を見せるが、その中世都市としての特質はどのようなものであっただろうか。

北小路町の寺院跡が平氏南都焼討ちによって焼失したという事実から考えられるように、ちょうど古代と中世の境目に位置する大災害は、それまでの都市形成の論理を大きく転換する契機であったことは間違いない。

それを言い換えると、都市の支配者層（上級貴族・寺社）の独占物であった在地の自然に対する素朴な信仰を一般の都市民に取り戻すことである。

平安京では早く10世紀中葉にはじまる「志多良神」の迎え入れ、12世紀前半のやすらい祭の成立にみられるような都市構成員たちの宗教・祭祀分野への意志の表現が認められる。

しかし、南都では神奈備の山容をもつ御蓋山が都市民の自然に対する信仰的行為の中心となったことは想像に難くないが、平安京のような積極的な動きはみられない。むしろ、春日大社は藤原氏との結びつきをより強化していったと言えることができる。これは、御蓋山に対する都市民すべてのものであるべき信仰を、藤原氏の側から取り戻せなかったと結論すべきであり、平安京として比較した場合の南都の特質である。

そしてそれは、南都焼討ちという古代と中世の境目に位置する南都の中世的発展の契機ともなるべき大きな事件に遭遇しても、不完全にしか実現されなかったのである。

3 中世都市南都の終末と奈良奉行所

近代以降に成立したのではない伝統的な日本の都市にはその構造とそれらをもたらし基本概念の変化を生じさせる両期が2時期あったと考えられる。

ひとつは上述したように、都市の形成・発展の原動力が支配層から一般都市民に移行する段階であり、中世前期から後期にかけて長い時間の中で都市の様々な様相の中で実現されている。

もうひとつは中世後期末の戦国城下町を代表とする、戦国大名の強権による都市の構造の転換である。特に、いわゆる「総構え」構造を基本とした階層別の住み分けは、近世・近代を経て日本各地の主要都市に受け継がれている。

奈良では戦国大名が強権を発動して都市の構造を大きく変えたという歴史的事実は見当たらない。やや遅れて興福寺西北隅に奈良奉行所が設置されたのであるが、近世幕藩体制の成立は近世初頭の奉行所にこの役割を与えていなかったようである。すなわち、奉行所の西150mのところにある北小路町で検出された溝SD531は、内側(奉行所側)に土塁をもち、近世初頭に一挙に埋められたことが明らかとなっているが、奉行所を中心とした総構えの構造の一部とも考えられる。奉行所設置で称名寺をはじめいくらかの民家が移転したことは知られているが、それ以上のところは明らかでない。要するに中世南都の構造を大きく変えるには至らなかったのである。

このように中世南都から近世奈良町への移行は、戦国城下町のような都市構造の大きな変革のないまま行われたと言える。あくまでも、興福寺・春日大社を軸とした都市様相の継続と変化と位置づけられ、この両者が大きく変化しない限りは、他の戦国城下町に迫れる変革は得られなかったと考えられよう。

VI おわりに —奈良の都市的性格—

平氏による南都焼討ちと奈良奉行所の設置という都市・奈良にとってエポックメイキングな歴史事実を構内遺跡の発掘調査によって確認しえたわけであるが、このいずれにおいても、奈良にとって他の多くの伝統的都市が画期としてきたようには、大きな変革をもたらす原動力とはならなかった。

春日大社・興福寺の地域における比重が大きすぎたというよりは、それを突き破る都市民の力や、それを醸成する環境が十分に育たなかったとすべきであろう。

そして、このことは中世後期を迎えても都市の基本的な運営が、都市民たる郷民よりも興福寺配下の衆徒に委ねられていたことから知る事ができる。

構内遺跡は、興福寺寺城外の西北辺に位置する、いわゆる「周縁部」であり、中心部た

る目的域とは違って、それを支える機能域ともいうべき部分である。

しかし、13世紀にこの周縁部は、都市機能維持のための先進的といってもよい諸施設をそなえた。おそらくこれは、周縁部だからできたことであり、古代以来の様相をそのまま維持する興福寺伽藍地では考案されなかったことであろう。

都市の機能域たる「周縁部」は、時としてこのような先進的・創造的な活動を行うことがある。目的域たる中心部が都市本来の目的に沿った活動の方法を見失ってしまっているならば、そのときはこういった周縁部の様相に目を向けるべきであろう。

周縁部で生じたものを選択的に受容し、都市全体の新たな発展の構想を再生産していくことは、短期的視野からする場当たりの都市計画が多い現代日本でも、考えてみなければならぬ問題である。

そして「周縁部」における創造性を認識・重視するのは、都市の問題だけに留まらないであろう。

【参考文献】

大脇深「古代寺院の寺辺の景観を復元する—その研究史と問題の所在—」(『摂河泉の古代寺院とその周辺』, 1997年9月)

泉谷康夫『興福寺』(吉川弘文館, 1997年11月)

貝塚市教育委員会「沢城跡の調査」(『貝塚市埋蔵文化財調査報告』第16集, 1988年3月)

(財)大阪府文化財センター『粟生間谷遺跡』古代・中世編(『(財)大阪府文化財センター調査報告』第85集, 2003年2月)

菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」(『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論集, 1983年)

第一四研究会「王権とモニュメント」『安祥寺の研究—京都市山科区所在の平安時代初期の山林寺院—』I(京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム『グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成』成果報告書, 2004年3月)

坪之内徹「南都における初現期の瓦器」(『堅田直先生古希記念論文集』, 1997年3月)

奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』XII(1985年3月)

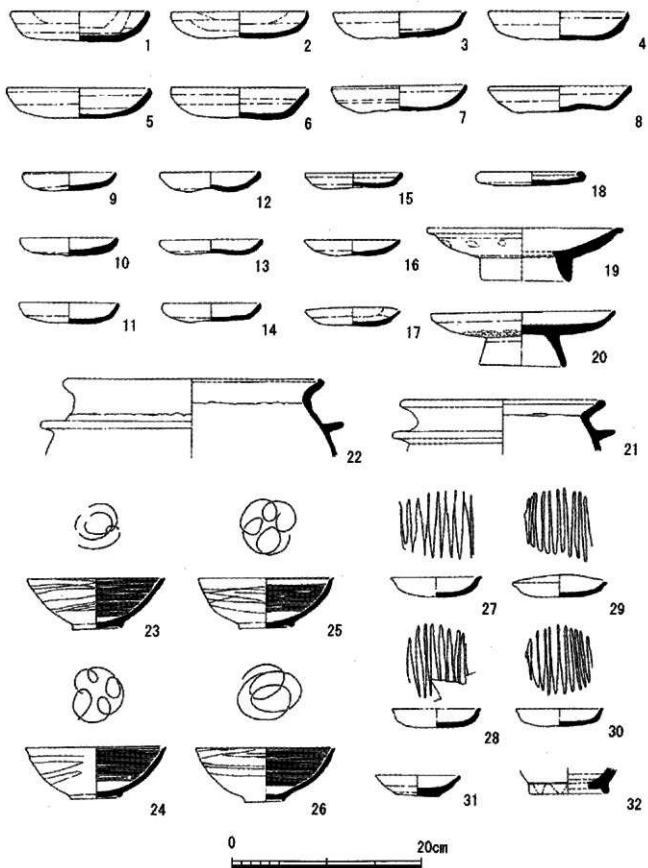
西弘海「土器様式の成立とその背景」(『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集』, 1982年)

藪中五百樹「平安時代に於ける興福寺の造営と瓦」(『仏教芸術』194号, 1991年)

图版·附表

第1表 SE202 出土土器 観察表

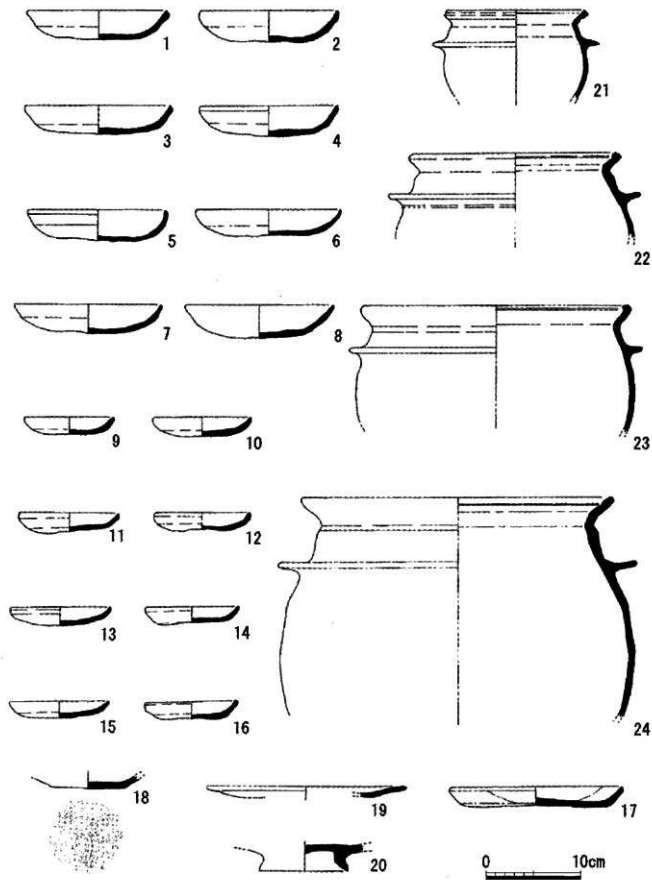
図中番号	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
		口径	器高	底径				
1	土師器皿	14.8	3.3		赤色クワ砂、白色細砂粒、灰色砂粒を含む	良好	明灰赤褐色	口縁1/6欠損
2	土師器皿	14.6	2.9		赤色クワ砂、金雲母片を含む	良好	明灰褐色	
3	土師器皿	14.2	2.9		白色砂粒、黒色砂粒、やや小さな白色砂粒を含む	良好(堅緻)	淡灰褐色	
4	土師器皿	15.0	3.1		大粒赤色粒、赤色クワ砂、白色砂、金雲母、白色細粒を含む	良好	灰褐色	外面に煤状の物質付着
5	土師器皿	15.5	3.2		赤色クワ砂、金雲母片、白色砂粒を含む	良好	明赤灰褐色	内面1/2ほど表面剥落
6	土師器皿	14.6	3.35		赤色クワ砂、金雲母片を含む	良好	淡灰褐色	内底面不定方向の軽いナデ、外底面に墓状物質の上に覆いた痕跡
7	土師器皿	14.4	3.2		赤色クワ砂、白色砂粒、金雲母片、黒細砂粒を含む	良好	明灰赤褐色	外面巻上げ痕跡有り、底部外面磨擦痕
8	土師器皿	15.3	2.9		赤色クワ砂、白色砂粒、黒細砂粒を含む	良好	灰赤褐色	外面巻上げ痕跡
9	土師器皿	9.9	1.9		白色粒を含む、雲母多い	良好	淡赤褐色	
10	土師器皿	10.4	1.9		白色粒を含む、雲母多い	良好	淡赤褐色	
11	土師器皿	10.6	2.2		白色砂粒をほとんど含まない、雲母片多い	良好	暗灰褐色	口縁一部欠損
12	土師器皿	10.8	2.1		白色砂粒をわずかに含む、雲母片含む	良好	暗赤褐色	
13	土師器皿	11.0	1.7		やや粗/白色砂粒、雲母片を少し含む	良好	灰褐色	外面一部が白い薬のようになっている
14	土師器皿	10.6	2.0		白色砂粒をほとんど含まず、雲母片多い	良好	淡灰褐色	
15	土師器皿	10.2	2.0		白色砂粒、金雲母片を多く含む	良好	淡赤褐色	
16	土師器皿	10.4	2.0		1mm程度の白色粒、白色砂粒、金雲母片を含む	良好	淡灰褐色	
17	土師器皿	9.7	1.9		白色粒を多く含む	やや軟	淡灰白色	
18	土師器皿?	11.7	1.5		白色粒、金雲母片を多く含む	良好	暗赤赤褐色	残存率1/3
19	土師器台付皿	20.6	5.6	9.5	赤色クワ砂、金雲母、白色細砂粒を含む	良好	暗赤赤褐色	
20	土師器台付皿	19.6	6.0	9.2	赤色クワ砂、金雲母、白色砂粒、黒細砂粒を含む	良好	暗灰褐色	皿部外面・脚部外面に煤付着
21	土師器土釜	(22.7)	—	脚径(23.6)	灰色砂粒、雲母片を含む	良好	暗赤褐色	外面全面煤付着
22	土師器土釜	(27.6)	—	脚径(32.0)	白色細砂粒、赤色クワ砂を含む	良好	灰茶褐色	
23	瓦器碗	14.6	5.4	5.3	黒/白色粒をほとんど含まない、雲母少し含む	良好	黒灰色	
24	瓦器碗	14.8	5.5	5.3	1mm以下の白色粒をわずかに含む、雲母含む	良好	黒灰色	
25	瓦器碗	14.4	5.3	5.8	1mm以下の白色粒、雲母含む	良好	黒灰色	
26	瓦器碗	14.8	5.3	4.2	密/白色粒をほとんど含まない、雲母少し含む	良好	黒灰色	
27	瓦器小皿	9.7	2.1		密/白色粒をほとんど含まない、雲母少し含む	良好	黒灰色	内外面ともに青く変色した箇所有り
28	瓦器小皿	9.4	1.9		密/白色粒をほとんど含まない	良好	黒灰色	
29	瓦器小皿	10.0	2.4		密/白色粒をほとんど含まない、雲母少し含む	良好	濃黒灰色	
30	瓦器小皿	9.4	1.85		密/白色粒をわずかに含む	良好	黒灰色	
31	土師器小皿	9.0	2.4		全体に微細砂状白色砂粒を含む	良好	淡灰赤褐色	内面薄く全輪、煤状物質付着、底部外面糸切り痕あり
32	白磁壺	—	(2.4)	(8.6)	白色砂粒、黒色砂粒を含む	良好	淡灰白色	軸は淡灰白色



第1圖 SE202 出土土器

第2表 SE203 出土土器 (1) 観察表

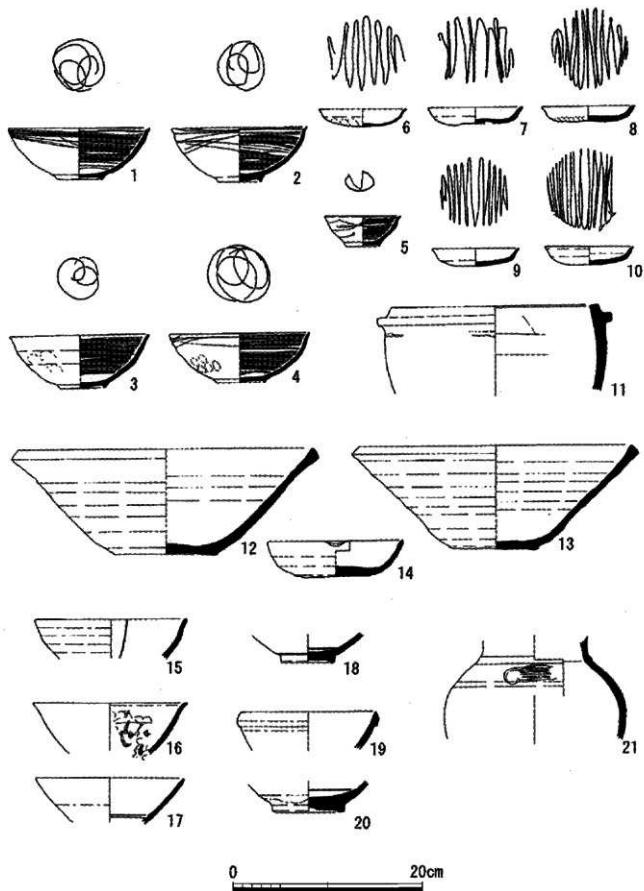
図版番号	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
		口径	器高	底径				
1	土師器皿	15.0	3.2		密/雲母を多く含む	良好	橙褐色	底部未調整
2	土師器皿	14.8	3.4		密/1mm程度の白色粒をわずかに含む	良好	橙褐色	内外面ともに丁寧なナデ
3	土師器皿	15.6	3.1		1mm程度の白色粒をわずかに含む、雲母多い	良好	橙褐色	
4	土師器皿	14.9	3.2		1-2mmの白色粒を含む、雲母非常に多い	良好	橙褐色	底部未調整、厚さも不均
5	土師器皿	14.8	3.35		1-2mmの白色粒をわずかに含む、雲母非常に多い	良好	橙褐色	内面丁寧な不定方向のナデ
6	土師器皿	15.4	2.8		密/白色粒をほとんど含まない、雲母多い	良好	暗橙褐色	底部に指痕が残る
7	土師器皿	15.6	3.0		密/白色砂粒をわずかに含む、雲母非常に多い	良好	明橙褐色	底部未調整、煤付着
8	土師器皿	15.8	3.5		1mm以下の白色粒をわずかに含む、雲母多い	良好	明褐色	
9	土師器皿	9.5	1.8		1mm以下の白色粒をわずかに含む、雲母多い	良好	赤褐色	全体的に粗雑
10	土師器皿	10.4	2.1		1mm以下の白色粒を少し含む、雲母非常に多い	良好	赤褐色～茶褐色	底部不定方向のナデにより、成形痕を丁寧に消す
11	土師器皿	10.6	2.2		やや粗/1mm以下の白色粒を少し含む、雲母多い	良好	淡赤褐色	調整も粗い
12	土師器皿	10.2	2.0		白色粒をほとんど含まない、雲母非常に多い	良好	赤褐色	内面丁寧なナデ、底部未調整
13	土師器皿	10.6	2.0		白色粒をわずかに含む、雲母非常に多い	良好	淡赤褐色～灰褐色	内面丁寧なナデ、底部未調整
14	土師器皿	10.0	1.9		やや粗/1mm以下の白色粒を少し含む、雲母多い	良好	淡赤褐色	
15	土師器皿	10.5	1.8		1mm程度の白色粒を含む、雲母多い	良好	赤褐色	内面に煤付着、底部未調整
16	土師器皿	9.8	1.9		白色粒をわずかに含む、雲母多い	良好	赤褐色	
17	土師器皿	18.4	3.1		金雲母、白色細粒、赤色クワ砂を含む	良好	淡赤褐色	底部外面部分的に指頭痕を残す→内底面のナデと対応か
18	土師器皿	--	--	8.0	黒色細砂粒、やや大きな白色砂粒を含む	良好	明黄灰褐色	底部外面糸切り痕跡
19	土師器皿	21.0	1.3		赤色砂粒、赤色クワ砂、白色砂粒を含む	良好	暗赤褐色	
20	土師器台付皿	--	2.9-9.4		金雲母、白色細粒、赤色クワ砂を含む	良好	赤褐色	
21	土師器土釜	15.6	9.0-	口径(17.5)	1mm程度の白色粒を含む、雲母多い	良好	橙褐色	外面煤付着
22	土師器土釜	22.4	9.0-	口径(26.5)	1mm程度の白色粒を多く含む、雲母多い	良好	赤褐色	
23	土師器土釜	(28.4)	13.0-	口径(30.9)	密/白色粒をほとんど含まない	良好	褐色	外面煤付着
24	土師器土釜	33.0	23.0-	口径(37.8)	1mm程度の白色粒、雲母を含む	良好	褐色	踵部分が欠損した後も引き続き使用した痕跡がある



第2圖 SE203 出土土器 (1)

第3表 SE203 出土土器 (2) 観察表

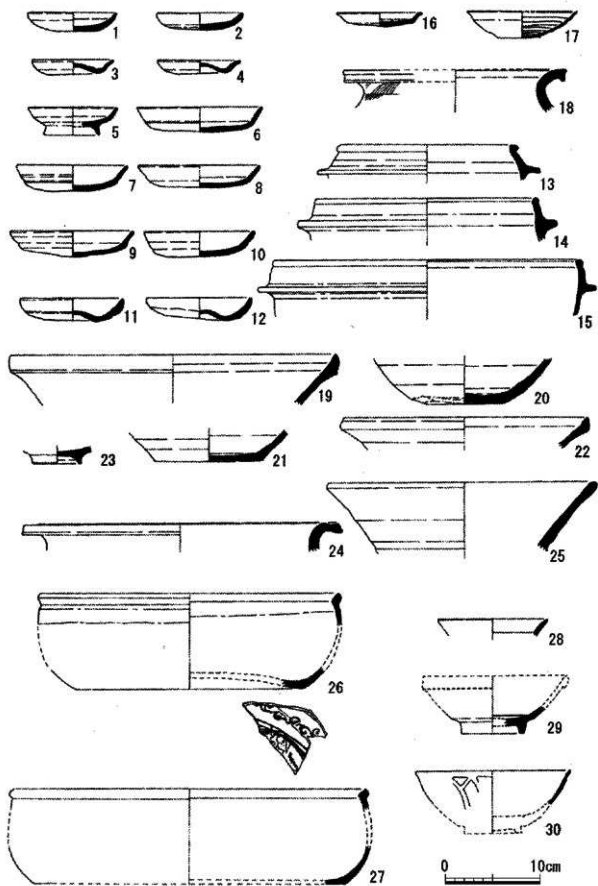
図版 番号	器 種	法 数 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
1	瓦器碗	15.0	5.4	4.7	1mm以下の白色粒をわずかに含む、雲母含む	良好	黒色～灰白色	
2	瓦器碗	14.3	5.3	4.6	白色粒をほとんど含まない、雲母多く含む	良好	黒灰色	
3	瓦器碗	14.8	5.6	4.7	泥/砂粒をほとんど含まない、雲母含む	良好	黒灰色	
4	瓦器碗	14.3	5.2	5.1	1mm以下の白色粒をわずかに含む	良好	黒灰色	
5	瓦器碗	8.0	3.2	3.5	白色粒をほとんど含まない	良好	黒灰色	
6	瓦器小皿	9.2	1.95		泥/白色粒をほとんど含まない	良好	黒灰色	
7	瓦器小皿	9.95	1.9		1mm程度の白色粒を含む	良好	黒灰色	
8	瓦器小皿	9.9	1.6		白色粒をほとんど含まない	良好	黒灰色	外面底部に指痕痕残る
9	瓦器小皿	9.2	1.9		白色粒をほとんど含まない	良好	黒灰色	外面不定方向のナデ
10	瓦器小皿	9.4	2.0		泥/白色粒をほとんど含まない	良好	黒灰色	
11	瓦器十蓋	19.0	9.0-	口径 (24.8)	やや大きな白色砂粒を含む	良好	灰白褐色	
12	須恵器すり鉢	31.2	11.1	10.7	やや粗/1-3mmの白色粒を多く含む	良好	淡灰白色	粘土紐巻き
13	須恵器すり鉢	28.9	10.95	9.3	やや粗/1-3mmの白色粒を多く含む	良好	暗青灰色	底部糸切りか
14	須恵器注口付皿	14.4	3.7		1mm以下の白色粒をわずかに含む、雲母含む	良好	灰白色～茶灰色	底部糸切り、内面に自然袖付着
15	青磁碗	16.0	(4.3-)		泥/黒色砂粒をわずかに含む	良好	淡茶褐色	龍泉窯系か
16	青磁碗	(16.4)	—		泥/黒色砂粒をわずかに含む	良好	淡白青灰色	
17	白磁碗	(15.8)	—		泥/黒色砂粒を含む	良好	灰白色	袖は淡黄灰色
18	白磁碗	—	—	(5.8)	1mm程度の白色粒、黒色粒を含む	良好	灰白色	袖は淡黄色
19	白磁碗	(15.0)	—		1mm程度の白色粒、黒色粒を含む	良好	灰白色	袖は淡黄灰色
20	白磁碗	—	—	(7.0)	1mm程度の白色粒をわずかに含む、黒色砂粒を多く含む	良好	淡灰色	袖は灰白色
21	西耳壺	—	—		白色粒をわずかに含む、黒色砂粒多い	良好	淡灰色	袖は淡黄灰色



第3圖 SE203出土土器(2)

第4表 SK201 出土土器 観察表

図版 番号	器 種	法量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
1	土師器皿	9.4	2		密/雲母を多く含む	良好	淡褐色	
2	土師器皿	9.2	1.8		密/雲母を多く含む	良好	淡褐色	
3	土師器皿	8.6	1.6		密/雲母を多く含む	良好	褐色	
4	土師器皿	8.7	1.5		密/雲母を多く含む	良好	淡褐色	
5	土師器台付皿	(9.4)	2.9	(5.9)	比較的密/雲母含む	良好	淡褐色	
6	土師器皿	13.2	2.1		密/雲母含む	良好	淡褐色(黒褐色・赤褐色も所に混じる)	
7	土師器皿	11.6	2.3		密/微小黒色砂粒含む	良好	淡褐色	
8	土師器皿	12.9	2.3		密/雲母を多く含む	良好	淡褐色	
9	土師器皿	13.1	2.8		密/雲母を多く含む	良好	橙褐色	
10	土師器皿	11.6	2.7		密/雲母・1mm大白色砂粒含む	良好	淡褐色	
11	土師器皿	10.8	2.6		密/雲母・微小黒色砂粒を含む	良好	淡褐色	
12	土師器皿	11.2	2.4		密/雲母を多く含む	良好	淡褐色	
13	土師器土釜	(18.2)	—	口径 (23.6)	密/雲母・0.5-1mm大の白色砂をわずかに含む	良好	淡茶褐色	外面全体にスス付着
14	土師器土釜	(23.2)	—	口径 (27.4)	良/0.5-1mm大の白色砂をわずかに含む	良好	淡褐色	外面全体にスス付着
15	土師器土釜	(32.2)	—	口径 (35.4)	良/0.5-1mm大の白色砂・石英をわずかに含む	良好	淡茶褐色	内・外面全体にスス付着
16	瓦器皿	9.1	1.5		密	良好	淡灰白色	外底面に手押ね痕残る
17	瓦器碗	(11.6)	2.8	4.4	密	良好	灰白色	貼付高台・外底面に手押ね痕・指紋残る
18	瓦質土器甕	(23.4)	—	—	密	良好	黒灰褐色	頸部に部分的にタタキ目
19	東播系須恵器控鉢	(34.3)	—	—	密/0.5-1mm大の白色砂をわずかに含む	良好	灰褐色	
20	東播系須恵器控鉢	—	—	(8.0)	比較的密/黒色砂少々、0.2-0.8mm大の白色砂を多く含む	良好	濃灰色	外底面に糸切痕残る。底部の角を欠くナデる。
21	東播系須恵器控鉢	—	—	(11.3)	密/5mm大の黒色砂少々、1-3mm大の白色砂を多く含む	良好	濃灰色	
22	東播系須恵器控鉢	(25.8)	—	—	密/0.5-1mm大の白色砂をわずかに含む	良好	灰褐色	
23	山系碗小碗	—	—	5.2	密/1-2mm大の白色砂を多く含む	良好	灰褐色	重ね焼き痕。内面に濃緑色の自然釉が少々かかる
24	陶器罐	(33.0)	—	—	密/1-8mm大の白色砂を含む	良好	灰褐色	内面および頸部に濃緑色の自然釉がかかる
25	陶器鉢	(28.0)	—	—	密/1-2mm大の白色砂を多く含む	良好	淡灰褐色	
26	中国製黄釉陶器甕	(32.0)	(10.0)	(24.0)	密	良好	暗黄褐色	
27	中国製黄釉陶器甕	(38.0)	(10.0)	(32.8)	密	良好	暗黄褐色	茶褐色の敷繪
28	中国製青磁皿	(11.5)	—	—	密	良好	灰白色	同安窯系
29	中国製白磁碗	—	—	(6.0)	密	良好	黄白色	外面に回転へら削り痕、残存部分では内面のみに乳白色の釉を施す(口縁形態は復元)
30	中国製青磁碗	—	—	—	密	良好	灰色	縁のない蓋弁文様を有する。内外の器面全体に青灰色の釉を施す



第4圖 SK201 出土土器

遺構全景
(北から)



遺構全景
(西から)



SE202



SK304



SE301





SK305



SK305



SK305

SE202(手前)
とSK201



埋甕遺構



SE401





遺構全景
(上から)



遺構全景
(南から)

SK101



SE203



SE306



SE306



SE306



SE404





土師器皿・耳皿



瓦器碗・瓦器皿



土師器土釜
その他



土師器



瓦器



須恵器・
国産陶器

輸入陶磁器
(内面)



(外面)



土師器・瓦器・須恵器
輸入陶磁器・その他





(新E棟)



(H棟)

附篇

宮路淳子

「奈良女子大学構内遺跡新 E 棟出土のイヌ」……………1

瀧田雪江

「南都における東海系土器

—奈良女子大学構内遺跡出土の山茶碗と甕について—」……………3

図表目次

tab. 1 奈良女子大学構内遺跡新 E 棟出土のイヌの部位一覧

表 I 東海各窯における山茶碗および甕の生産動向

表 II 分析資料一覧

fig. 1 奈良女子大学構内遺跡新 E 棟発掘調査出土のイヌ

図 I 東海の中世窯の位置

図 II 構内遺跡出土の中世前期東海系土器

図 III 構内遺跡出土の知多産甕および山茶碗の年代

奈良女子大学構内遺跡新 E 棟出土のイヌ

宮路淳子(奈良女子大学大学院 人間文化研究科 准教授)

1. 出土資料の概要

奈良女子大学構内遺跡新 E 棟の発掘調査では、13 世紀後半のトイレ遺構 SK201 からイヌの骨が 5 点出土した。出土層位からは、これらの資料が遺構開口時に放り込まれた状況が想定されている。

これらの資料は、すべて発掘調査時に肉眼観察によって取り上げられたものであり、土壌サンプリングおよび水洗などによる選別が行われたものではない。

2. 分析

イヌ *Canis familiaris*

5 点出土している。部位は、上顎骨、下顎骨、橈骨、脛骨（各左 1）大腿骨（右 1）である。同一団体の可能性が高い。

山内忠平の推定式（山内 1958）を用いて体高を復元推定すると 40cm となる。頭骨の最大長は 160mm 前後と復元でき、これを長谷部言人の型区分（長谷部 1952）に当てはめると中小級犬に属する。比較的小さなタイプのイヌだといえる。

永久歯が萌出していること、さらに各部位の骨端部が近位端・遠位端とも癒着していることから、1.5 歳以上の成獣と考えられる（Sisson 1953）。歯の磨耗はあまり進行していないので、さほど高齢ではない。

3. 中世遺跡出土のイヌ

本遺跡から出土したイヌの骨の表面を観察した結果、いずれの資料にも切痕は見つからなかった。よって、本資料は人為的に四肢骨を切り離されたものではない可能性が高い。

中世遺跡からのイヌの出土例は、福山市草戸千軒遺跡、堺市北花田口遺跡などが知られる。草戸千軒遺跡からは多数のイヌが出土しているが、骨の表面に切痕が非常に多く残る。解体時に付けられたものと考えられ、これらのイヌが食用に供されていたことを示す。

また北花田口遺跡からは、17 世紀中頃の、ダックスフントのような四肢の短い種類のイヌが出土しており、当時の日本に多様な形態のイヌが持ち込まれていたことが明らかにされている（山内・嶋谷 1989）。

『洛中洛外図』には、市中においてイヌを捕縛しようとする人物達が描かれた情景がある。中世においては、市中を闊歩するいわゆる野良イヌは捕獲の対象とされていたことがわかる。

本遺跡出土のイヌは、これまでほとんど明らかにされてこなかった、南都における中世の動物利用の実態を考える上で大変重要な資料といえる。今後類例の増加を待ちたい。

*骨の計測は斎藤および Driesch の方法 (斎藤 1963、Driesch1976) に準拠した。

参考文献

斎藤弘吉 1963『犬科動物骨格計測法』私家版

松井章 1994「草戸千軒町遺跡第36次調査出土の動物遺存体」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』
II 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 pp.343-364

山内昭二・嶋谷和彦 1989「堺市北花田口遺跡 (KHG2 地点) 出土の犬骨について」『堺市文化財調査概要報告』第5冊 堺市教育委員会 pp.82-82

山内忠平 1958「犬における骨長による体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告』7 鹿児島大学農学部 pp.125-131

Driesch, A. von den. 1976, *A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites*. Peapodey Museum Bulletin 1. Harvard: Peopody Museum
Sisson, S 1953, *The Anatomy of the Domestic Animals*, W.B.Saunders Co.

tab.1 奈良女子大学構内遺跡新E棟出土のイヌの部位一覧

No.	出土地点	地区	大分類	小分類	部位	左右	最大長	CM	BM	備考
33	6AEB	DH89	哺乳類	イヌ	上顎骨	左		×	×	P2/4
33	6AEB	DH89	哺乳類	イヌ	下顎骨	左		×	×	M2
33	6AEB	DH89	哺乳類	イヌ	桃骨	左	103.1	×	×	
33	6AEB	DH89	哺乳類	イヌ	脛骨	左	124.4	×	×	
33	6AEB	DH89	哺乳類	イヌ	大腿骨	右	110.5	×	×	

CM=切痕 BM=被熱痕 数値単位はmm



fig.1 奈良女子大学構内遺跡新E棟発掘調査出土のイヌ

南都における東海系土器

—奈良女子大学構内遺跡出土の山茶碗と甕について—

瀧田雪江 (奈良女子大学大学院 博士前期課程)

はじめに

中世前期の東海地方において、大量に焼かれた山茶碗は日常雑器として特徴的である。山茶碗は在地向けに生産された食膳具である。近畿地方では同じく在地向けに作られた瓦器椀が、山茶碗とほぼ同期間に生産されている。その状況の中、わずかながら山茶碗は畿内へも搬入されている。対照的に、知多窯産の甕は12世紀後半頃から畿内に多く見られる。

東海の中世窯の生産地研究は、多くの研究の蓄積により一通り体系化されている。それをうけ、詳細に全国の消費地との関わりを検討できる段階にある。そのひとつの地域として近畿地方が挙げられ、全体把握をねらう集成が見られるようになってきた。しかしながら、いまだその詳細な個別の検討とそれらの比較研究が少ないために、在地土器と東海系土器の関係や、流通背景を想定するにも実態が判然としない状況にある。奈良女子大学構内遺跡においても、中世前期の東海系土器として、甕、山茶碗、片口鉢や瀬戸の施釉陶器などが出土している。そこで小稿では、中世前期の南都¹⁾における具体的な消費・流通に迫る第一歩として、これらの資料を在地土器との関わりを含めて検討していきたい。

1. 古代末から中世前期における東海地方の土器様相

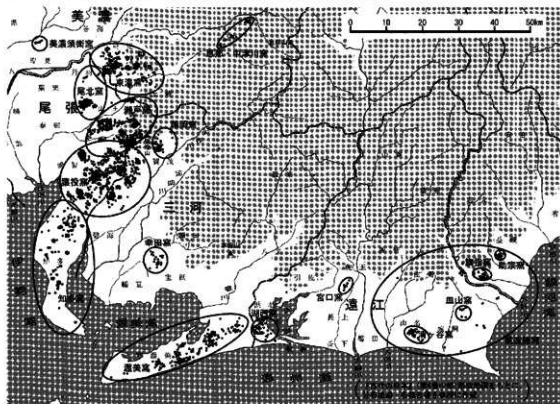


図1 東海の中世窯の位置

古代末から中世前期における各地の土器生産や消費状況については、数々の概説に詳しいが、本遺跡出土品の理解を深めるために、とくに東海の様相についてここでひととおり触れておきたい。

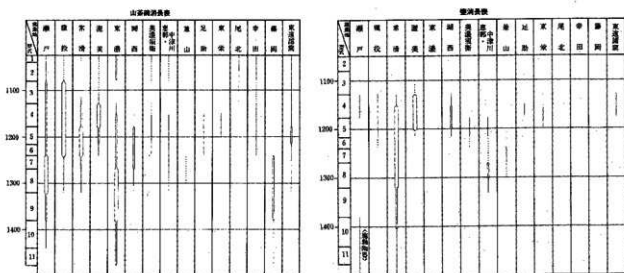
(1) 古代末—緑釉陶器・灰釉陶器—

8世紀中頃から中国製の白磁碗や青磁製品が輸入され始めると、9世紀初頭から中国磁器を写して緑釉陶器の生産が山城・摂津・近江・丹波や尾張・美濃などで行われる。これらは古代末まで京の貴族や官衙などを中心に消費される。まもなく、須恵器生産でも大規模操業を誇った猿投窯では、文献に見える「白瓷」すなわち灰釉陶器の生産が開始され、初期には緑釉陶器と同じ窯で焼成される。

平窯において2度の焼成を必要とする緑釉陶器に対し、灰釉陶器は、尽きることのない植物灰などを釉とし、容量の大きい窖窯での一次焼成のみとする。また、施釉方法は、開始期には浸し掛けがされていたが、刷毛塗りそして漬け掛けへと変遷する。こうした量産化、施釉方法の簡略化と相俟って、調整手法も粗雑化しており、大量に重ね焼きされるようになって、最終的に施釉しない碗となる。この無釉の碗を古くから「山茶碗」と俗称していたために学術的にもそう通称するようになったが、初期の山茶碗と灰釉碗を明確に線引きするには困難な場合がある。

(2) 中世前期—山茶碗と壺・四耳壺—

表I 東海各窯における山茶碗および壺の生産動向 (瀬戸市埋文 1993 文献より転載)



現在の山茶碗研究は、藤澤良祐氏の研究成果を基礎に進展してきた。藤澤氏は、瀬戸窯製品を資料として、形態や製作技法などから4段階10型式(のち11型式)に分類した[藤澤1982]。山茶碗の生産範囲は、美濃・尾張・三河・遠江にわたり(図1)、動向には各々差があり生産地のまとまりごとに編年が行われているが、全体としておおむね同一の変化をたどる。以下、藤澤氏の設定した型式に即して大まかではあるが山茶碗生産の変遷について

てまとめておく。

第Ⅰ段階（11世紀中葉～後葉）として、第1・2型式は灰釉のかかった山茶碗（「灰釉山茶碗」）、そして第Ⅱ段階となる第3型式（11世紀末～12世紀初頭）から無釉になり、窰窯の床面積は拡大され、山茶碗専業の生産体制となる。実際に消費地で多量に出土するのは、第3型式以降のものが見られ、現実的にはこの第3型式以降が「山茶碗」と認識されるところであろう。山茶碗の型式には5類型（美濃須恵型・東濃型・尾張型・渥美湖西型・東遠型）あり、その大別は各窯体構造の相違ともほぼ一致する。

山茶碗には大碗と小碗が作られ、生産地周辺の消費地においてはおよそ同率で出土し、成立当初よりセット関係にあったことがうかがわれる。また、知多窯や渥美窯などでは、山茶碗を大きくしたような形態の片口鉢（捏鉢）も生産され始める。

各型式の絶対年代は、共存遺物の紀年銘などが根拠になっている。第3型式まではその資料がないが、第4型式段階の山茶碗では、渥美の大アラコ窯において三河守藤原頼長（保延三(1137)・久安元(1145)年、久安五(1149)・久寿二(1155)年在任）の短頸壺が共存したことから年代が知られ、第5型式以降の製品も併焼品から年代が当てられている。

一方、この12世紀中頃に甕生産が確立する。12世紀末葉には知多³⁾・渥美などの沿岸部を中心に各窯で生産が行われた貯蔵容器であるが、山茶碗が古代の灰釉碗の系譜を引くのに対し、甕は須恵系からの連続性はほとんど見られず、独自の形態と技術をもつ。また、同じ頃から、白磁四耳壺の模倣で瀬戸や猿投、美濃などの内陸部で、四耳壺が水注や瓶子とともに生産されるようになる。

第Ⅲ段階、第5型式期（12世紀後葉）には、古瀬戸様式の成立により、東海地方では瀬戸窯における施釉陶器、知多窯における壺・甕類という分業体制が確立する。甕類と四耳壺などは、基本的に同一窯内で生産されず、他方で両者は日本各地に広域流通する点で共通し、同様の交易背景をもちながら分業されたことが想定される。

また、第5型式頃から常滑・渥美両窯では、山茶碗の器高が浅く、胎土は粗くなり、瀬戸・東濃窯では器高がやや高く口径が狭く、胎土が緻密になる、というように相違が明確になり、南部系と北部系として分けられる。同時に、それまで碗に伴っていた小碗が、高台のない小皿に代わる。

甕は、山茶碗第6型式（13世紀前葉）の初頭には、ほとんどの窯で生産を停止し、現在の常滑窯に集約する。この動きと同様に、四耳壺などの生産も、第7型式（13世紀中葉）には瀬戸窯に集中する。それ以外の窯は、山茶碗を専業的に焼成するようになる。

第Ⅳ段階、第8型式（13世紀後葉）より、前段階の瀬戸窯内で併焼された無釉の製品と施釉陶器は完全分業生産となる。また、大碗の高台が省略され、形態の扁平化が進み、多くの窯が第8型式までには山茶碗生産を終えるが、東濃や瀬戸では第11型式（15世紀中葉）まで存続する。

このように東海の中世窯では、在地向けの山茶碗生産と、壺・甕や四耳壺など広域に流通する製品の生産とに特徴づけられる。山茶碗研究では、併行関係を把握する段階にいた

った反面、各型が一元的な編年であるために、主流とは異なる形態の碗や皿があることについて再検討の必要性が指摘されており〔岡本 2005〕、東海の中世窯研究が体系化したとはいえ、消費地研究において生産地研究を参照する場合にも注意を要する。

2. 構内遺跡出土資料について

では、生産地の動向について把握したところで、構内遺跡で出土した東海の中世窯で生産された資料についてみていきたいと思う(表Ⅱ・図Ⅱ)。ちなみに、本遺跡では中世前期の古瀬戸の施釉陶器も若干ながら出土しているが、今回はそれらを省いている。

(1) 資料の観察

A. 山茶碗類

山茶碗類には、尾張型の大碗 4 点(1)(2)(5)(6)、小碗(4)、小皿(3)、東濃型の大碗 2 点(7)(8)の計 8 点見られる。このうち、(1)と(2)、(5)と(6)、(7)と(8)はそれぞれ同一の遺構内から出土している。

(1)(2)は、別個体と考えられるものだが、どちらも山茶碗における初期の様相を呈している。そして、この年代観は、共存する土師器皿や瓦器碗などの在土器の年代とも同様の生産時期である。また、(3)は他の山茶碗類と比べると砂地の胎土で、12 世紀後半に渥美窯産で生産されたものと考えられ、共存土器の年代ともずれはない。

それに比べて、(4)～(8)は様相が異なる。まず(4)は小碗の底部であるが、高台部分が非常にしっかりとした初期の山茶碗の特徴をそなえる。12 世紀初頭(もしくは 11 世紀末)に生産されたものと思われるが、構内遺跡においては 13 世紀後半の土器群と共存する。

続いて(5)および(6)は、知多窯産と見られ、知多窯の編年を体系化させた中野晴久・赤羽一郎両氏による分類で 6a 型式に相当し、13 世紀第 3 四半期の年代が与えられるものである。これらと共存する在地の土師器などは、およそ 14 世紀後半の様相を示している。

また、(7)(8)の東濃型の大碗は、知多窯産のものと同じころの生産品であり、これも 14 世紀後半の在土器と共存している。山茶碗の標準型式となっている瀬戸窯の 7、8 型式期ころより、山茶碗の生産は、南部系山茶碗に代わって、北部系山茶碗である東濃での生産が中心になってくる。こうした現象は、構内遺跡の中においても変遷を追うことができるようだ。

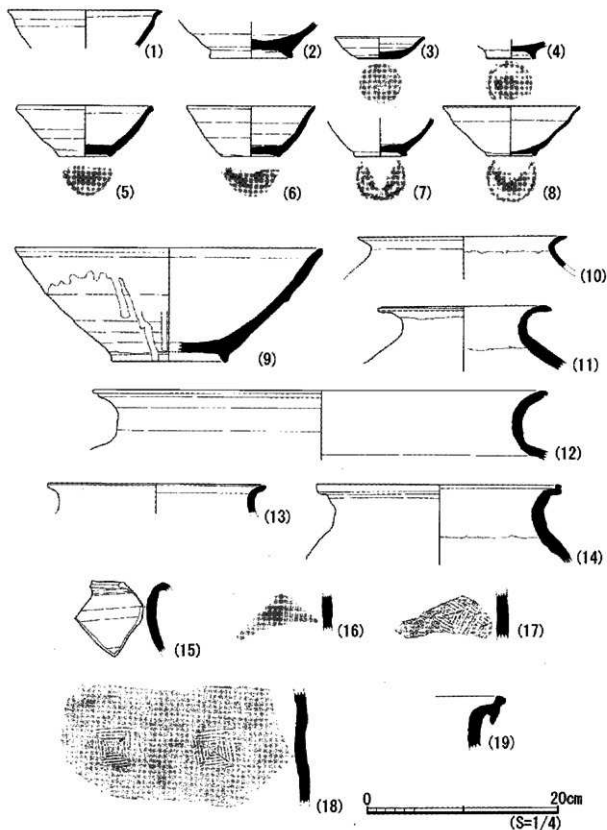
さて、(4)～(8)に見られた在土器の時期差については、おそらくは山茶碗の伝世品としての性格が考慮されるだろう。そして(5)～(8)の出土した遺構の時期は、大和においてすでに瓦器碗生産がされていない時期である。しかしながら食膳形態には碗が必要であったために、古くに搬入された山茶碗を、この時期まで使用したのではないだろうか。その点については周辺地域の資料との比較検討を通じ、再度考えたいと思っている。

B. 片口鉢

続いて、知多窯(12 世紀後半頃)の片口鉢 I 類 2 型式が、池状遺構より出土している(9)。これと同様の用途を持っているだろう東播系須恵器鉢も、同じ遺構より出土している。

表Ⅱ 分析資料一覽

図番号	器種	産地 (類型)	生産地における 年代観	出土 遺構	共伴遺物	共伴土器の 年代観	概観
(1)	山茶碗 ・大碗	尾張型	12世紀半ば～後半 (4型式)	(講堂) 井戸 SE2797	土師器皿、瓦器碗・皿、東播系 須恵器埴鉢、中国製白磁碗	12世紀後半	Ⅱ
(2)	山茶碗 ・大碗	尾張型	12世紀半ば～後半 (4型式)	(新E棟) 井戸 SE201	土師器皿、瓦器碗	12世紀後半	Ⅶ
(3)	山茶碗 ・小皿	尾張型 ・滄美窯か	12世紀後半 (5型式)	(新E棟) トイ遺構 SK201	土師器皿・土釜、瓦器碗・皿、 東播系須恵器埴鉢、瓦質土 器甕、陶器甕・鉢、中国製黃釉 陶器盤、青磁皿・碗、白磁碗	13世紀後半	Ⅶ
(4)	山茶碗 ・小碗	尾張型	12世紀初頭 (3型式)	(講堂) 上壇 SK2816	土師器皿・土釜、東播系須恵 器埴鉢、中国製白磁碗	14世紀後半	Ⅱ
(5)	山茶碗 ・大碗	尾張型 ・知多窯	13世紀後半 (7型式(知多6a型式))	(E棟) 井戸 SE2310	土師質埴鉢・土釜、瓦質埴 鉢・香炉・火舎、中国製青磁・ 白磁、緑釉	14世紀後半	Ⅰ
(6)	山茶碗 ・大碗	尾張型 ・知多窯	13世紀後半 (7型式(知多6a型式))	(G棟) 池 SG01	土師器皿・小碗・土釜、把手 付鉢、瓦器碗・皿、東播系須恵 器埴鉢・碗、中国製白磁・青 磁皿	12世紀中葉 ～12世紀後半	Ⅵ
(7)	山茶碗 ・大碗	東濃型	13世紀半ば～後半 (7型式(明和1号窯式))	(F棟) 土壇 SK2892	土師器皿、瓦器碗	12世紀末 ～13世紀初頭	Ⅱ
(8)	山茶碗 ・大碗	東濃型	13世紀半ば～後半 (7型式(明和1号窯式))	(G棟) 井戸 SE01	土師器皿、瓦器碗、東播系須 恵器埴鉢、中国製白磁・青磁 皿	13世紀末 ～14世紀前半	Ⅵ
(9)	片口鉢 Ⅰ型	知多窯	12世紀後半 (知多2型式)	(北小路) 溝 SD431	土師器皿・土釜、瓦器碗、東播 系須恵器埴鉢、瓦質埴鉢・深 鉢・浅鉢・火鉢、中国製白磁	14世紀後半	Ⅴ
(10)	甕	知多窯	12世紀後半 (知多2型式)	(新E棟) 井戸 SE301	土師器皿・土釜、東播系須恵 器埴鉢、中国製白磁皿・青磁 皿	14世紀後半	Ⅶ
(11)	甕	知多窯	12世紀後半 (知多2型式)	(圖書館) 井戸 SE4017	土師器皿・土釜、瓦質埴鉢・ 長方形甕・火舎、灰軸折軸盤、 瀬戸花瓶、備前埴鉢	15世紀中葉 ～後半	Ⅳ
(12)	甕	知多窯	12世紀後半 (知多2型式)				
(13)	甕	知多窯	12世紀後半 (知多1b型式)				
(14)	甕	知多窯	13世紀中葉～後半 (知多5型式)				
(15)	甕	知多窯	13世紀中葉～後半 (知多6a型式)				
(16)	甕	知多窯	13世紀 (知多5～6a型式)				
(17)	甕	知多窯	13世紀 (知多5～6a型式)				
(18)	甕	知多窯	13世紀 (知多5～6a型式)				
(19)	甕	知多窯	13世紀末 (知多6b型式)				

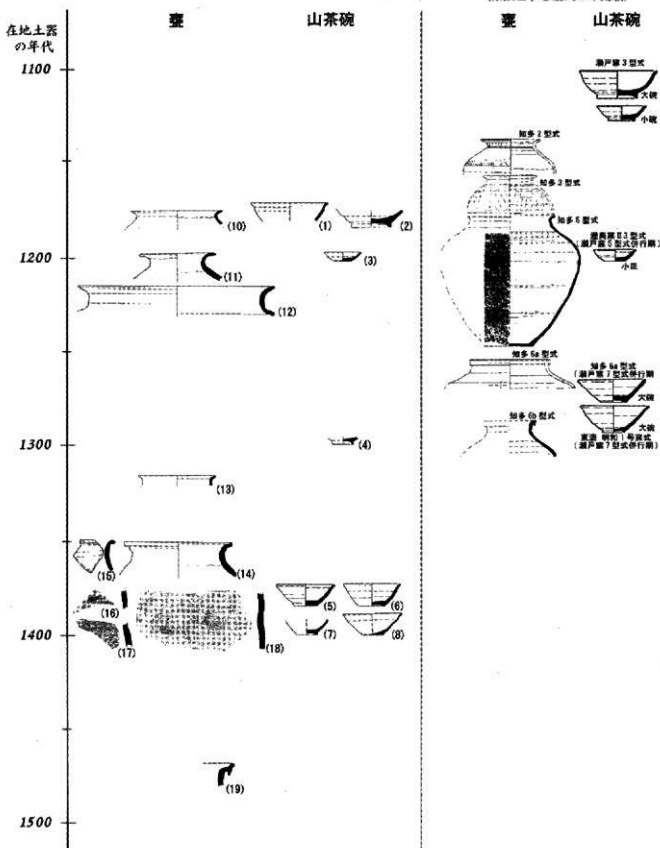


図Ⅱ 構内遺跡出土の中世前期東海系土器 (筆者実測・トレース)

〈 構内遺跡 〉

〈 生産地 〉

(※該当する型式のみ掲載)



図Ⅲ 構内遺跡出土の知多窯産甕および山茶碗の年代 (S=1/8)

(生産地の土器図は各報告書より再トレース)

中世前期の畿内では、東播系須恵器の捏鉢が普及している中で、知多窯産の片口鉢がしばしば見られる。片口鉢は、山茶碗の形態変化と連動しており、生産地圏外の消費地での研究において、山茶碗同様、さらに注目され検討されるべきであろう。

C. 甕

そして、(10)～(19)の甕は 10 点あり、いずれも知多窯産と考えられる。大きく分けて 12 世紀後半代のもの(10)～(12)と、13 世紀代後半あたりのもの(13)～(19)とが見られる。その中でも、出土遺構の年代が 13 世紀末より新しい(13)～(19)については、在地土器の年代よりも甕の生産された年代が 100 年以上古い傾向にある。さきにも山茶碗の項でも同様な事実を述べたが、甕の場合はその理由としてはまず、破損の可能性の低い、貯蔵容器としての性格に起因するものと考えられる。

なお、甕 10 点中 3 点の体部破片に、押印文と呼ばれる、甕体部を一周するように施されるスタンプ文様がみられるが、口縁部がないため年代決定の指標に欠ける。知多窯の甕は 12 世紀前半の生産開始から、体部に押印文がランダムに施され、12 世紀後半からの量産化のなかで器壁が薄手になるとともに、成形工程に対応して体部の押印文が 5 段ほど帯状に連続施文されるようになる。次第に 13 世紀後半には成形過程に対応せず、肩部のみの施文や無文のものが多くなり、16 世紀後半にはまったく施文されなくなる。押印文の分類については、中野晴久氏の詳細な研究があり [中野 1992,2001]、それによれば押印文の使用には若干の年代的傾向が見られ、本遺跡出土の場合、知多窯 5～6a 型式期 (13 世紀代) に比較的良好に見られる文様が押印されており、年代的には同じ遺構内から出土している甕(15)とも矛盾はないものと考えられる。

14 世紀代になると、生産地においては、現在の常滑市中心域に集約されて専門的に甕生産を行うようになる時期ではあるが、構内遺跡を含め南都において知多窯の甕は見られなくなり、代わって備前焼や信楽焼の甕が増えてくる傾向にある。こうしたなんらかの競合関係とも言える状況についても、畿内で出土する甕について詳細が明らかにされていくべきであろう。

3. まとめ

今回とりあげた資料のなかで、山茶碗は 12 世紀代に生産されたものは瓦器碗を伴い、13 世紀代に生産されたものには瓦器碗は共伴しない。共伴する 3 点も瓦器碗に比べれば僅少である。また、12 世紀末～13 世紀後半に生産された(4)～(8)は在地土器の年代よりも 100 年から 150 年ほど古く、それは甕(13)～(19)においても同様のことがいえる。一方で、12 世紀後半代に生産され、長く時を経ずに廃棄された山茶碗や甕がある。これらを、共伴在地土器の年代を軸に生産地年代と対応させて図示した (図 III)。

13 世紀前半にやや空白をもって、それ以前と以降で、生産地の年代との差の有無が分かれている。つまり、在地土器の年代から見た場合、13 世紀前半代を境にして東海系土器の

出土状況に変化が見られる。その原因は一体なんなのであろうか。13世紀前半代に南都へ一定量搬入されている甕や、それに付随するかのようにはばらに見られる山茶碗において、南都へ影響を与えるほどの技術的変革が生産地にあったとは思われない。それよりも本遺跡一帯に影響を与えた大きな変化といえば、治承四（1180）年の南都焼討ちであろう。本篇でも述べられているように、構内遺跡においてもその時の火災を示す焼けた瓦の存在や、13世紀代に入って初めて本遺跡内に造られたトイレ遺構の存在から、焼討ち以後この遺跡の性格が変わったことが考えられる。すなわち、13世紀に入ってからの東海製品の出土状況の変化というものは、それら製品の技術面の変化というよりは、居住者の変化などの消費者側に起因する社会的な要因によるものと考えられる。

おわりに

小稿では、中世前期における東海系土器、主に知多窯の甕と、東海各地で生産されたの山茶碗をとりあげて、南都に存在する構内遺跡でのそれらの位置づけを考察した。

中世前期には、食生活に関わる主な土器の基本は皿、椀、調理には捏鉢、そして貯蔵には甕を用いる、という生活習慣および意識を広い範囲で共にしていたと想定される。これらの器などは、各地域で調達の方法が異なっており、中世前期の南都において、甕は知多窯のものを入手していたが、椀形態では畿内は瓦器椀が主体であるために、東海で一般的な椀形態である山茶碗は畿内ではあまり見られない。

こうした食膳や貯蔵器種ごとの補充の状況は、地理的側面や技術的側面に左右された消費者側の需要があるからこそではあるが、他方でこの時期は、中世後期に広く見られてくるような生産者側の商業活動の萌芽期とも受けとられる。今後、具体的に商人と呼べる存在などが追えないか、また近隣地域の文化と共通性が見られないかなど、考古資料とともに文献や絵画資料からも検討してみたいと思う。

中世土器研究において、生産地研究が進む一方で、消費地研究は生産地とのかかわりを含めて今後ますます進んでいこう。今回は一般層とまでは迫れなかったが、古代末から中世への一般の人々の生活がどのように変わっていったのか、中世社会の実像に迫るには考古学分野の果たす役割は大きいと感じている。

（謝辞）

今回の発表にあたっては、本学の坪之内徹先生に快く資料提供をして頂き、また、ご指導をたまわりました。そして、資料の一部の産地および型式年代については、常滑市郷土資料館の中野晴久氏にご教示を頂きました。末筆ながら、記して両氏に心より感謝いたします。

註

1) ここでいう中世南都とは、東大寺および興福寺の寺域を中心とする地域である。

- 2) 美濃須衛窯のみ。12世紀前半～13世紀前半。
- 3) 知多古窯址群の範囲は、操業開始期の窯の多くは現在の愛知県大府市以南の知多半島一帯に分布していたが、13～4世紀頃には次第に現在の常滑市旧市街域に収束し今日に至る。そのため特に甍は「常滑焼」と表現されることが多いが、上記のとおり時期による規模の違いがあるため、山茶碗同様に「知多窯」の呼称を用いている。

【主要参考文献】

- 岡本直久 2005 「山茶碗編年の現状について」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』
財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター1993『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター企画展 東海の中世窯—生産技術の交流と展開—』
- 知多古文化研究会 編 1985 『鎗場・御林古窯址群』(常滑市文化財調査報告第15集)、常滑市教育委員会
- 知多古文化研究会 編 1993 『亀塚池古窯址群発掘調査報告書』(常滑市文化財報告第10集)、常滑市教育委員会
- 常滑市教育委員会 1981 『高坂古窯址群』(常滑市文化財報告第10集)、常滑市教育委員会
- 常滑市教育委員会 1983 『常滑市出地田古窯址群発掘調査報告書』(常滑市文化財調査報告第12集)、常滑市教育委員会
- 中野晴久 2001 「知多古窯址群の研究5～刻文と押印文」『伊勢灣考古』15・磯部幸男先生追悼論文集(知多古文化研究会 編)、知多古文化研究会
- 中野晴久 2005 「常滑・産美」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』発表要旨集、全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会
- 奈良女子大学 編 1983 『奈良女子大学構内遺跡 発掘調査概報』Ⅰ、奈良女子大学
- 奈良女子大学 編 1984 『奈良女子大学構内遺跡 発掘調査概報』Ⅱ、奈良女子大学
- 奈良女子大学 編 1989 『奈良女子大学構内遺跡 発掘調査概報』Ⅳ、奈良女子大学
- 奈良女子大学 編 1995 『奈良女子大学構内遺跡 発掘調査概報』Ⅴ、奈良女子大学
- 奈良女子大学 編 1999 『奈良女子大学構内遺跡 発掘調査概報』Ⅵ、奈良女子大学
- 奈良女子大学 編 2007 『奈良女子大学構内遺跡 発掘調査概報』Ⅷ、奈良女子大学
- 藤沢良祐 1982 「瀬戸古窯址群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅰ、瀬戸市歴史民俗資料館

奈良女子大学構内遺跡
発掘調査概報Ⅶ

平成 20 年 3 月 発行

編 集 奈良女子大学埋蔵文化財発掘調査室

発 行 奈良女子大学施設企画課

印 刷 奈交サービス株式会社
